妻たちよ、夫に従いなさい！

英語圏の福音派の世界では――あらゆる教派にわたって――少なくとも毎月一冊、男女の問題と、それに関連するあらゆるテーマについての新しい本が出版されています。ジェンダー、トランスジェンダー、結婚、家族、妊娠中絶、虐待、キリスト者の結婚におけるドメスティック・バイオレンスなどです。ドイツではその頻度はもっと低く、人々は現状に安住してしまっています。このテーマを取り上げる本は、年におそらく三冊ほどでしょう。

キリスト教の世界にはいくつもの嵐のような波が押し寄せており、それは、どの世代においてもこれらの問いに新たに向き合い、自分自身のために、また自分の結婚と教会のために、私たちが男女の関係をどのように生きるべきか、また生きることができるのかを新たに理解する十分な理由となっています。キリスト者はイエスと使徒たちに、したがって聖書に方向づけられています。

よく知られているように、多くの保守的なキリスト者は男女の関係を、おおむね次のように理解しています。すなわち、アダムは、そしてアダムとともにすべての男性は、エバに対して、また女性そのものに対して、上位の、より責任の重い指導的役割を持っている、というのです。それゆえ女性は従い、教会において職務をまったく、あるいはわずかしか持ちません。女性は説教もせず、教えもしません。これは教会史の教えです。一世紀と二世紀の教えではありませんが、そこから始まって数十年前までの教えです。そして多くの人は、これが神の真理であり、正しい教えと生き方であると考えています。その動機が聖書への忠実さであることは、疑いの余地がありません。この男性支配が根本から問い直されて初めて、それまで気づかれなかった思考パターンが明らかになるのです。

アメリカでは、この見方は T4G やゴスペル・コアリション（Gospel Coalition）といった比較的新しい運動によって、そして最も強く南部バプテスト（Southern Baptists）によって主張されています（ダンヴァーズ声明〔The Danvers Statement〕）。グルーデム（Grudem）、ムーア（Moore）、パイパー（Piper）、シュライナー（Schreiner）、ケステンベルガー（Köstenberger）、デヤング（DeYoung）、ケラー（Keller）、カーソン（Carson）、ストームズ（Storms）、マッカーサー（MacArthur）、ストラウク（Strauch）は、この――私に言わせれば根本的に誤った――見方を擁護している著名な人物たちです。私自身、長いあいだこの見方を支持し、教えてきました。そして、ここに名前を挙げた兄弟たちの大半とその釈義の仕事を高く評価しています。意見の相違は、この男女のテーマに関わるものです（そして彼らが支持しているカルヴァン主義にも関わりますが、それはここでは関係ありません）。

ドイツでは、いくつかの団体や出版社が、これらの指導者たちに従い、これらの主張を新たに装って聖書の真理として売り込むことを自らの使命と感じています。ここでいくつかを挙げます。それらの「聖書への忠実さ」は、ほとんどの点で私自身もまったく同じように支持していますが、この男女のテーマについては違います。E21、EBTC、3L出版、CLV出版、CSV出版、CV Dillenburg、Betanien など、閉鎖系および自由系のブレザレンの集会、ロシア系ドイツ人の影響を受けた教会、一部では FeG（自由福音教会）や EFG（福音自由教会）も、そして KFG.org に掲載されているすべての教会です。

この文書には、南アフリカのテラン・ウィリアムズ（Terran Williams）の本『How God Sees Women: The End of Patriarchy』から二つの章が収められています。彼自身は大きな教会の牧師で、少し前までは補完主義の見方、すなわち女性の階層的な服従を――ただし穏健な形でですが――支持し、上に挙げたアメリカの兄弟たちに従っていました。ところが彼は聖書のテキストにもう一度徹底的に取り組み、その結果この見方を完全に捨てざるを得なくなったのです。私自身にも、似たような、いやほとんど同じことが起こりました。そこから生まれたのが一冊の本です。それは改めて目を開かせてくれる本であり、この家父長制的で補完主義的な見方をあっさりと論駁しています。

Hans-Jörg Ronsdorf、2022年4月、2026年10月補筆

本全体がドイツ語で入手できるようになりました

テラン・ウィリアムズ：『Wie Gott Frauen sieht. Biblische Perspektiven jenseits von Macht und Tradition』（『神は女性をどのように見ておられるか――権力と伝統を超えた聖書的視点』）、Kirche für Alle、2026年。

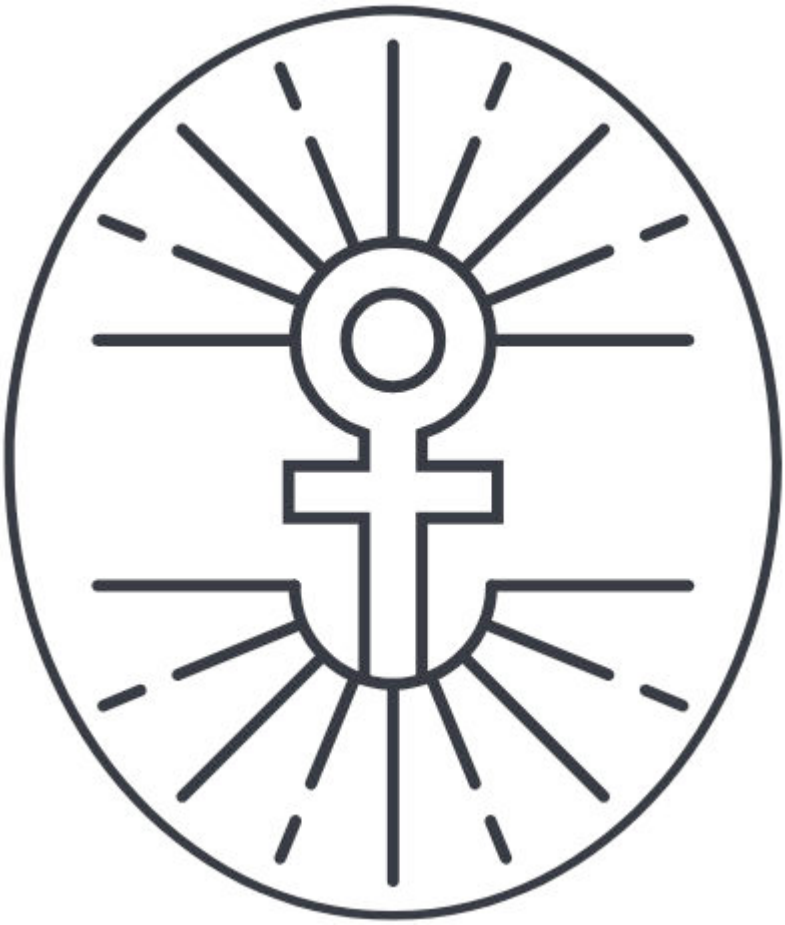
ペーパーバック、18.80ユーロ（ISBN 978-3-9826027-8-3）：https://www.amazon.de/dp/3982602785

Kindle電子書籍、9.80ユーロ：https://www.amazon.de/dp/B0HDPLZJ3C

本についての詳細：https://www.hans-joerg-ronsdorf.de

以下の二つの章――第8章「妻たちよ、夫に従いなさい」と第9章「適応される神」――は、このドイツ語版の本文です。

8



妻たちよ、夫に従いなさい

「夫婦は互いに階層的な関係にあるのでもなければ、それぞれが好きなことをする自律した単位として互いに切り離されているのでもない。むしろ結婚とは、互いに従い合う関係なのである。」リチャード・ヘイズ（Richard Hays）[1]

「私たちは娘たちに、いつか夫に従うための備えをさせなければなりません。」最近、ある母親が私の妻にそう言うのを聞いて、私は本当に考え込んでしまいました。私は本当に娘のアイヴィー（Ivy）に、いつか夫に従うようにと教えるべきなのでしょうか。自分自身の結婚における指導と服従というテーマだけでも、すでに十分に個人的なものです。しかし、結婚について子どもたちにどんな教えを伝えるべきかを考えなければならないとなると、正しいことを教えなければならないという責任をなおさら強く感じるのです。

一点補完主義

この章と次の章のための調査をしている間に、私はようやく、神がすべての結婚に対して持っておられる理想には、夫と妻の間のごく穏やかな形の権威と服従さえも含まれている、という考えに、最終的かつ完全に別れを告げました。エペソ人への手紙5章で読んだことから、私は長いあいだ、妻に対する夫の自己犠牲的な指導は、教会に対するキリストの自己犠牲的な指導を映し出すべきものだと考えていました。

一点補完主義は、女性は教会と社会において男性を指導してよいが、妻は夫に対して一種の一方的な服従を実践すべきだ、という見方を支持しています。[2] これによって、それは結婚と教会の両方における女性の服従を求める二点補完主義とは区別されます。興味深いことに、世界中の多くの神学者や教会が一点補完主義を支持しています。[3]

この本を読む二点補完主義の支持者の多くは、女性を教会の指導から排除することをやめるよう説得されるかもしれませんが、それでも結婚における何らかの形の権威と服従にはこだわり続けるかもしれない、と私は想像します。私自身、何年かこの立場をとっていたので、そのことはよく理解できます。

エペソ人への手紙5章の研究が進むにつれて、私が一点補完主義をも捨てるに至ったとき、興味深いことに、それによって私の結婚に本質的な変化は何も生じませんでした。これから説明するように、私は自分がすでに結婚生活において多かれ少なかれ相互主義者（Mutualist）であったことに気づいたのです。というのも、二十年近い私の結婚経験が何かを教えてくれたとすれば、それはこういうことです。対等な結婚は、一方のパートナーが導き、もう一方が従う結婚よりも、はるかに望ましいものです。しかもそれは、私や他の人々が何度も説教してきた「キリスト教的」結婚についての、次のような数多くの美しいスローガンにもかかわらずなのです。「彼は自分を犠牲にし、彼女は従う。彼は導き、彼女はついて行く。彼は働きかけ、彼女は肯定する。」[4]

イエスは妻に対する夫の指導的役割について一言も触れておられませんが、[5] パウロはそれについて多くを語っているように見えます。とりわけ、この章で主として扱うテキストであるエペソ人への手紙5章においてです。それは次の節です（LUT〔ルター訳、ドイツ語聖書翻訳〕）。

21 キリストを畏れて、互いに従い合いなさい。

22 妻たちよ、主に従うように、自分の夫に従いなさい。23 なぜなら、キリストが教会のかしらであるように、夫は妻のかしらだからです――キリストは教会をご自分のからだとして救われました。24 そして、教会がキリストに従うように、妻たちもすべてのことにおいて夫に従うべきです。25 夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のためにご自分を献げられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。26 それは教会を聖なるものとするためでした。キリストはみことばによる水の洗いによって教会をきよめられました。27 それは、しみやしわや、そのようなものが何一つない、聖なる、傷のない栄光の教会を、ご自分のために整えるためでした。28 同じように夫たちも、自分の妻を自分のからだのように愛すべきです。自分の妻を愛する者は自分自身を愛しているのです。29 いまだかつて自分の身を憎んだ者はいません。むしろ、キリストが教会にそうされたように、それを養い育てるのです。30 私たちはキリストのからだの部分だからです。31「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。」32 この奥義は偉大です。しかし私は、キリストと教会のことを指して言っているのです。33 ですから、あなたがたもそれぞれ、自分の妻を自分と同じように愛しなさい。しかし妻は夫を畏れ敬いなさい。

この章に取り組んでいるとき、C・S・ルイス（C. S. Lewis）の一文が心に浮かびました。「多くの人が……、パイプをくわえ鉛筆を手にして難しい神学のテキストと取り組んでいるうちに、自分の心がおのずと歌い出すのに気づく。」エペソ人への手紙5章はそのような難しいテキストであ

り、神学がぎっしり詰まっていて、私はもう何年もこれと取り組んできました。私がこれほど集中的にこのテキストと格闘してきたのには、三つの理由があります。

第一の理由はこうです。私にとって地上で最も大切な関係は、妻との関係です。私は神のことばに従い、神の知恵を自分の結婚に当てはめたいと願っています。そしてこの箇所は結婚というテーマについての最も重要な聖書テキストの一つですから、私はそれを正しく理解したいのです。

第二の理由はこうです。「夫が導き、妻が従う」というこの箇所の読み方は、私自身の経験と文化的な認識に反しています。もう少し詳しく説明させてください。私は、私と同じくらい――多くの点では私以上に――教養があり有能な女性と結婚しています。彼女は私よりお金の扱いが上手で、現在は私より多く稼いでいます。彼女は子どもたちの感情的・実際的な必要を私よりよく見極めることができます。そして彼女は生まれつき、私よりも人々のグループを上手に導くことができます。そのうえ、神は私と同じくらい、彼女にも私たちの家族と奉仕について語っておられるように思えます。私が彼女に対して自分の指導的役割を主張するなら、それは恣意的であるだけでなく、私たちの関係と彼女の能力を傷つけることのように思えます。正直に言えば、彼女に私の指導を差し出すよりも、対等なパートナーとして彼女と協力するほうが、はるかに良いことのように思えるのです。

私がこの箇所と格闘してきた第三の理由は次のとおりです。優れた聖書注解者たちでさえ、この箇所が語っていることについて異なる結論に達しており、牧師たちも、自分の確信を具体的な結婚にどう適用するかについて異なる結論に達しています。最初に読んだときには言葉がどれほど単純に見えても、よく見てみると、エペソ人への手紙5章は答えよりも多くの問いを投げかけます。最初の数節だけを考えてみましょう。なぜパウロは、夫婦関係についての説明を、互いに従い合うことについての節から始めているのでしょうか。「かしら」とは何を意味するのでしょうか。「従う」とは何を意味するのでしょうか。「従う」という語は、21節（「互いに従い合いなさい」）、22節（妻たちよ、夫に従いなさい）、24節（教会はキリストに従う）で、それぞれ同じ意味を持っているのでしょうか。そして妻たちが「すべてのことにおいて」夫に従うとは、具体的に何を意味するのでしょうか。

私はこれらの問いを、四つの異なる解釈――つまり「見解」――に基づいて扱っていきます。エペソ人への手紙5章のこの箇所の四分の三は夫に向けられているので、それぞれの見解を、キリスト者の夫に何が求められているかによって定義することにします。これら四つの見解は、夫を、決定を下す者（見解1）、決定票を投じる者（見解2）、対等なパートナーに仕える者（見解3）、そして贖われたpaterfamilias（家長）（見解4）と見なします。

見解1：夫は通常、決定を下す者である

これはウェイン・グルーデム（Wayne Grudem）の見解です。彼は、パウロがエペソ人への手紙5章21節で「互いに従い合いなさい」と言うとき、すべてのキリスト者がすべてのキリスト者に従うべきだという意味ではなく、単に、すべてのキリスト者は自分に対して正当な権威を持つ者たちにだけ従うべきだという意味である、と書いています。言い換えれば、服従は夫に対する妻に当てはまるのであって、決してその逆ではない、というのです。

彼は、「夫は妻のかしらである」における「かしら」は「〜の上に立つ権威」を意味すると言います。パウロは夫たちに妻たちの指導を引き受けるよう義務づけ、妻たちにはその指導を受け入れるよう勧めている、というのです。キリストが教会のためにそうされたように、夫が妻のために自分のいのちを献げることについてパウロが語るとき、それは、夫が妻を愛するだけでなく、愛をもって妻を導くようにと勧めているということだ、というのです。そして最後にパウロが創世記2章24節を引用するとき、グルーデムによれば、パウロは妻に対する夫の権威を、堕落前にアダムがエバを治めていたという記述に基礎づけているのだ、ということになります。

これらすべての実際的な影響について、グルーデムは、自分の結婚においてこれをどのように実践しているかを語っています。

大きな決定であれ小さな決定であれ、また私たちの意見が一致していようといまいと、決定の責任は常に私にあります。（ここで私が言っているのは私たち二人に関わる決定のことであって、私たちがそれぞれ自分の個人的な責任領域で下す個人的な決定のことではありません。）夫のかしらとしての立場が意味を持つのは、夫と妻が合意できないときの、十年に一度くらいのことにすぎない、という見方を私は支持しません。私の考えでは、夫のかしらとしての立場は、夫婦が結婚生活を通じて下すあらゆる決定において意味を持っています。真の意味で夫のかしらとしての立場があるなら、決定のプロセスの重心は妻ではなく夫にある、という暗黙の了解があるのです。そして、しばしば多くの話し合いがなされ、互いへの尊重と配慮が保たれるべきであるとしても、決定の責任は最終的には夫にあるのです。[6]

ジョン・パイパー（John Piper）もおおむねこの見解に同意しています。彼は、父親がふだん決定を下していた両親の結婚を、好意をもって振り返っています。

父が家に帰ってくると、彼ははっきりと一家のかしらでした。食前の祈りをささげたのは父でした。家族を家庭礼拝に呼び集めたのも父でした。私たちを日曜学校と礼拝に連れて行ったのも父でした。車を運転したのも父でした。どこに座るかを決めたのも父でした。昼食にハワード・ジョンソン（Howard Johnson’s）に行くことに決めたのも父でした。私たちをテーブルに案内したのも父でした。ウェイトレスを呼んだのも父でした。勘定を払ったのも父でした。私たちが家のルールを破ったり母に失礼な態度をとったりしたとき、相手にしなければならなかったのは父でした。それは母にとって最も幸せな時でした。ああ、父が家にいると母はどんなに喜んだことでしょう！ 母は父のリーダーシップを愛していました。後になって私は、聖書がこれを「服従」と呼んでいることを学びました。[7]

一般に広まっているキリスト教の結婚についての本のほとんどは、この見解を支持しています。たとえばある本にはこう書かれています。「夫は……家庭の重要な決定に責任を負っています。……心を開き、受け入れる姿勢を持った妻は、喜んで……自分の自由を、夫の愛、敬愛、保護、そして養いと引き換えに手放すのです。」[8] 別の本もこの意見を共有しています。「男性は家の外では多くの上司を持っているかもしれませんが、家では、親切なやり方で権威を行使し、自分にふさわしい尊敬を受ける機会があるのです。」[9]

ほかの見方に移る前に、次のことを言っておきたいと思います。1980年代に至るまで、ほとんどすべての聖書釈義者とキリスト者は、まさにこのように聖書を読んできました。ですから、これ

は真剣に受け止めなければならない見方です。

しかし、正直に言いましょう。このアプローチは私の結婚を殺してしまうでしょう！ 牧師として、私はこの見解を支持したことは一度もありません。グルーデムやパイパーが私とは異なる人生経験をしてきたことは疑いありません。しかし私には、一方の人が二人に関わる決定のすべて、あるいは大部分を下すような親密な関係というものは想像できません。私はこう結論づけます。この見解を支持する夫婦は、育ちや文化のために昔ながらの「伝統的な結婚」を好んでいるか、あるいは生まれながらの指導者である夫と、生まれながらに人について行く妻とから成っているかのどちらかです。しかし、すべての結婚がそのようにできているわけではありませんし、ジュリー（Julie）と私の結婚は決してそうではありません。ここ数十年の間に牧師や神学者たちがこの見方の修正版を提示してくれたことを、私はうれしく思っています。ある人々はそれを「穏やかな補完主義」と呼びますが、私はそれを「決定票を投じる者としての夫」と呼んでいます。

見解2：決定票を投じる者としての夫（まれな場合に）

ベストセラー The Meaning of Marriage [結婚の意味] の中で、ティモシー・ケラー（Timothy Keller）とキャシー・ケラー（Kathy Keller）は、補完主義の結婚のより穏やかな変種を支持しています。彼らは丸一章を、パウロが――グルーデムとは異なり――21節で結婚における男女の役割を互いに従い合うことの表現として描いている、という事実に充てています。ケラー夫妻は、互いに従い合うことを、へりくだって相手に仕え、相手を喜ばせるという決断として定義しています。

ピリピ人への手紙2章2-3節でパウロは、キリスト者の間では「へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい」と率直に語っています。……私たちは他の人の関心事を自分のことよりも重要と考えるべきです。別の箇所でパウロは、私たちは「自分を喜ばせるべきではない」と言い、むしろ「隣人の益となるように、その人を喜ばせ、その人の霊的な成長を図るべきです。キリストもご自分を喜ばせることはなさらなかったのです」と述べています（ローマ15:1-3）。パウロはキリスト者に、互いに「douloi」（ガラテヤ5:13）――文字どおりには奴隷――であることさえ求めています。……夫であれ妻であれ、私たちは自分のためにではなく、相手のために生きるべきなのです。そしてそれこそが、結婚における夫または妻の最も難しい、しかし最も重要な務めなのです。[10]

この見方によれば、互いに従い合うことは双方向に理解されるべきです。パウロは22-24節で妻たちに夫に従うよう求める一方、25-29節では夫たちに、どのようにして（自己犠牲的な愛をもって）妻に従うべきかを説明しているのです。

互いに従い合うことにもかかわらず、ケラー夫妻はかしらとしての夫の役割を引き続き支持しています。彼らはそれを、妻と互いに従い合う夫という言い方から、「仕える指導者の役割」に従う夫という言い方へと移ることによって行っています。[11]（ここで指摘しておかなければなりませんが、ここでの「従う」という語の使い方は疑問です。互いに従い合うという考えの場合とは異な

る意味を持っているからです。ある役割に従うことは、ある人に従うこととは決して同じではありません。）

ありがたいことに、ケラー夫妻は、過去何世紀にもわたって妻の服従として理解されてきたものよりも、はるかに穏やかな種類の指導を支持しています。「両者が合意できないが、決定を下さなければならないとき、［夫は］決定票を投じ、（それによって）その決定に対するより大きな責任を引き受ける権利を持っています。」[12] 別の箇所でティモシー・ケラーは、これを、「最後の言葉」を持つことによって妻の異議を「覆す」夫の権利と呼んでいます。[13] 言い換えれば、意見が一致しないときにだけ、日常の決定においてではなく、夫が決定を下すべきだということです。

長年「穏やかな」補完主義者であった私は、この方向に立つ他の多くの人々と同じように、この教えを、たとえば次のように言うことで適用してきました。「時々、ごくまれな場合に、決定を下さなければならないことがあります。意見が一致しないなら、妻は夫に、その件について決定を下してくれるよう頼むべきです。」私の友人で、南カリフォルニアの影響力ある補完主義の牧師であるアラン・フロウ（Alan Frow）は、たとえば、自分の結婚ではほとんどすべての決定が一緒に下されていると言い、さらにこう続けています。「私は結婚して25年になりますが、その間に妻が私に『私たちは意見が一致しないわ。あなたがリーダーなのだから、行って神を求めてきて』と言ったのは、たった五回だけです。」[14]

私自身の結婚では、私たちはいつも合意に達したので、私が自分の「決定権」を使う必要のないまま何年も過ぎました。しかしそれは同時に、ジュリーに対する私の「指導的役割」も、私に「従う」という彼女の義務も、私たちが実際に生きてきた経験の中では事実上存在しなかった、ということでもあるのです。

決定票モデルへの疑問

穏やかな補完主義の支持者の多くにとって――私自身も長年その一人でしたが――自分の立場を神学的に更新するという骨の折れる作業は、ほとんど労力に見合わないように思えます。一年のほとんど毎日、彼らの結婚の形は相互主義者のそれとまったく同じなのです。実際、もし私が、穏やかな形の権威と服従でさえ、本当にすべての結婚に対する神の理想なのだろうかと自問し始めていなかったなら、私はもっと長くケラー夫妻の見方にとどまっていたかもしれません（そして今もそうしている人々に理解を示します）。実際、私には五つの深刻な懸念さえあるのです。

第一に、夫の権威への妻の服従を理想として示すなら、教会と社会における彼女たちの重要な貢献を無視することがそれだけ容易になります。補完主義者たちは、妻の服従は自分の夫に対してだけであって、すべての男性に対してではないと強調するとき穏やかな姿勢をとってはいますが、それでも彼らはこの点を用いて、家で導かれる必要のある女性は教会で指導的役割を担うべきではない、と論じています。[15] たとえばフロウは、家族の中での結婚における役割は、キリストと教会の関係の「神秘的な鏡」[16]であると、まったく正しく言っています。確かに彼は、女性が社会において指導的な務めを担ってよいことを認めています。しかし彼は、「神の家族においては、この神秘的な映し出しが目に見えるものとなるべきだ」と結論づけるのです。

しかし、この飛躍は正当化されるのでしょうか。エペソ人への手紙5章でパウロは、夫と妻の一致は、キリストと教会の一致を指し示す「奥義」であると言っています。それならなぜ補完主義者たちは、この「奥義」を共同体全体にひとまとめに当てはめる自由が自分たちにあると考えるのでしょうか。その結果、男性の長老たちがなぜか夫としてのイエスを代表し（したがって男性でなければならず）、教会の残りの人々は花嫁を代表する（これは奇妙なことにこの類比から外れています。なぜならそこには女性だけでなく男性も含まれているからです）ことになってしまいます。さらに、教会の長老たちが教会の夫を代表するという考えは、危険で聖書的ではありません——とりわけ、明らかにイエスだけがこの役割を担っておられるのですから。結婚と教会の類比をさらに推し進めるなら、教会の指導者たちが担うべきなのはせいぜい、ヨハネの福音書3章29節のバプテスマのヨハネのように、花婿であるイエスの友人の役割でしょう。

第二に、私は自問しました。補完主義の結婚観によれば、なぜパウロは、堕落によって初めて生じた、まさにその階層的な秩序を理想として示すことになるのでしょうか。その堕落の結果を、神は約束としてではなく、不吉な予告として告げられたのです。「彼はあなたを支配することになる。」[17]

第三に、キリスト者の結婚において、配偶者による虐待が明らかにどれほど頻繁に起きているかに、私はいつも愕然とさせられます。エレイン・ストーキー（Elaine Storkey）のような社会学者は、女性の服従を神によって定められた規範として教えることは決して役に立たない、という見解を示しています。夫たちが自分の権威を「優しく」行使すべきだと聞かされたとしても、神によって定められた男性の権威という考え方によって、彼らは時として「あからさまに、あるいは無意識のうちに、男性の特権と権利要求を信じる」よう促されてしまうのです。「その結果、男性は、パートナーには当てはまらない自由や地位や意見に対する権利を主張するようになる」のです。[18] 夫たちの中でも最も聖められた部類に属するのでない限り、彼らはパートナーを本当に自分と対等な者と見なさないことによって、——たとえほんの少しであっても——彼女たちを劣った者として扱う傾向が強くなるのです。[19]

私が住んでいるアフリカでは、ジェンダーに基づく暴力の規模は実に恐ろしいほどです。私は、不従順を理由に妻を殴るキリスト者の夫たちの話を聞いたことがあります（そして、夫に不従順だという理由で自分の教会の女性を殴る牧師の話さえ聞きました）。さらに、いくつかの調査[20]が示すところによれば、女性の服従の教えは、虐待されている女性が暴力的な結婚にとどまり続ける可能性を高めます。そのうえ、彼女たちが助けを求めて相談する教会は、しばしば加害者から離れないようにと彼女たちに勧めるのです。もしこの教えが神の理想であるなら、なぜそれはキリスト者の耳に届くやいなや、これほどしばしば害をもたらすのだろうか、と私は自問しました。

第四に、私は穏やかな補完主義をより厳しい形のものよりもどれほど好ましく思っていても、それがまったく新しい創作であることを認めざるを得ませんでした。穏健な補完主義の結婚に至る解釈がわずか半世紀ほどの歴史しか持たないとすれば、それは相互主義の結婚に至る解釈よりもさらに新しいことになります。ケラー夫妻（Keller）流のこの新しい穏やかな補完主義には感謝していますが、グルーデム（Grudem）やラッセル・ムーア（Russell Moore）のような補完主義の

神学者たちが、このアプローチは実際には補完主義の結婚よりも相互主義の結婚に似ていると示唆するとき、私は彼らに同意せざるを得ません。もしテキストを冷静に解釈するなら、私が定期的に決定を下し、妻が私に従うことが求められるのだとすれば、私たちは実際には一度も「聖書的な」結婚をしてこなかったことになります。むしろ私たちの結婚は、「対等な夫婦のパートナーシップの中で互いに従い合うことを支持する」結婚であり、そこでは決定が「合意形成のプロセスを通して」下されている、ということになります――ムーアは、これを「フェミニスト的な」結婚であって、決して「聖書的な」、つまり補完主義の結婚ではない、と定義しているのです。[21] もしグルーデム（と歴史的な見方）が正しいなら、神は私が自分のふるまいを改めて、妻に代わってもっと多くの決定を下すことを望んでおられるか、さもなければ私は自分の神学を改めなければなりません。自分たちが信じていることと矛盾したまま生き続けるのは、まったくの首尾一貫性の欠如でしょう。

第五に、「なぜ妻は従うべきなのか」という問いに対しては、満足のいく答えがないと私は考えます。見解1は今日の私たちの多くにとって奇妙に思えるかもしれませんが、何世紀ものあいだ、それはまったく論理的なものでした。文化においても教会の教えにおいても、女性は男性より劣っており、それゆえ彼女たち自身の益のために導かれなければならない、という確信が通用していたのです。しかし1960年代以降、これらの考え方は文化においても教会においても時代遅れになりました。私たちは皆、夫よりも知的で決断力のある女性をたくさん知っています。ですから、彼女たちが意思決定において劣っているということはあり得ません。それでは、なぜなのでしょうか。

ケラー夫妻はこれに対する答えを持っています。「この問いへの答えは、もう一つの問いです。『なぜキリストは御父に権威を明け渡されたのか』。」彼らの考えでは、夫の権威への妻の服従は、キリストと御父の関係を映し出すべきものだというのです。しかし、私がすでに第3章と第6章で説明したように、これは三位一体の関係を誤って描いています。さらにそれは、聖書がどこにおいても、御子が御父に権威を明け渡すことを、妻が夫に権威を明け渡すことと同一視してはいない、という事実を見落としています。

ジョン・パイパー（John Piper）は別の答えを示しています。キリスト者の妻が夫に従うことは、見ている世界に対して、教会がキリストに従うことを表している、というのです。それは美しく聞こえますが、よく見てみると明らかになります。それが成り立つのは、夫が生涯毎日妻を導く見解1の場合だけなのです。見解2は、キリストによる教会の導きをうまく表していません――もしイエスが私たちの主であるなら、私たちはイエスの日々の導きに同意するのであって、意見が一致しないときにだけ時々イエスに切り札を出させるような、穏やかな共同の意思決定に同意するのではないのです。

確かにケラーやパイパーのような神学者たちは神学的な理由を挙げようと努めていますが、しばしばより実際的な考え方をする多くの牧師たちは、次のような論拠で夫の権威を正当化しています。頭が二つあるものはすべて怪物である、だから最後にだれが「ババ」［責任］をつかまされるのかを知っておくことが重要だ、というのです。しかし私はこの理由を受け入れることができません。その理由を説明させてください。

「最後にババをつかまされるのはだれか？」

二人の関係において、本当にいつも一人だけが責任を負わなければならないのでしょうか。そうしなければ結婚が壊れてしまうのでしょうか。スポーツチームにはキャプテンが、軍隊には将軍が、企業にはCEOが必要だということは理解できます。しかし、創世記2章25節が言うように、理想的には「裸」で、つまり意識して互いに傷つきやすい者として共に生きる、「一体」として結ばれた二人の人間に、指導者が必要だとはとても思えません！ むしろ二人は、対等なパートナーとして互いに愛し合い仕え合うことに、全面的に献身しなければならないのです。

結婚をテーマとする非常に影響力のあるキリスト教の本 Love and Respect, は、この議論を次のように述べています。「対等な二つのかしらを持つ結婚は失敗する運命にあります。それが、今日これほど多くの人が離婚する本質的な理由の一つなのです。」[22] しかし、この突飛な主張の証拠はどこにあるのでしょうか。このテーマについてのさらなる研究をぜひ読みたいものです。定期的に教会に通っている既婚および離婚したキリスト者の女性21,000人を対象とした最近の研究は、正反対の結論に達しています。「一方のパートナーが決定を下す夫婦は――たとえ事前にもう一方のパートナーと話し合い、その意見を求めたとしても――、決定権を分かち合っている夫婦よりも7.4倍も多く離婚している。」[23]

多くのキリスト者は、その神学的見解にかかわらず、このことを直感的に知っています。何千人もの回答者のうち、約40％は夫が最終的な決定権を持っていると信じており、約60％は妻が夫に従うことによって夫を愛すべきだと考えていました。それにもかかわらず、実際に夫が最後の言葉を持つように行動している夫婦は17.3％にすぎません。それに対して、78.9％の結婚は最終的な決定権なしに機能しています。つまり、パートナーたちは共に決定を下すか、意見が一致しないときには決定を保留しているのです。

ここで私たちは、私のような牧師があまり認めたくない二つのジレンマに直面しています。第一に、私たちが導いている人々の確信とふるまいの間に食い違いがあります。たいていのキリスト者は、夫こそが決定を下す者、あるいは意見が一致しないときに決定票を投じる者だと信じてはいますが、たいていの人はそれに従って行動してはいません。第二に、「多くのキリスト者の夫婦は夫が決定権を持っていると信じているが、この信念は、それが実践に移されるまでは夫婦に害を与えなかった」のです。私のような牧師は、神の民が自分たちの信じていることを実践し始めるよう主張すべきなのでしょうか。それとも、私たちが彼らに信じるよう教えてきたことを問い直すべきなのでしょうか。牧師として、自分が導いている夫婦のために本当に最善を望むのであれば、私はいくつかの厳しい事実に向き合わなければなりません。

妻たちが、自分の話は聞いてもらえず、自分の意見は夫の意見ほど重要ではないと感じている場合、離婚の可能性は26倍高くなります。……たとえ夫が妻に意見を求めたとしても、夫が決定権を持つ結婚においては、定義上、夫の意見のほうが妻の意見よりも重みを持ちます。そして妻たちが、自分の意見が夫の意見と同じ重みを持っていないと感じるとき、結婚が破綻する可能性はより高くなるのです。[24]

逆に、結婚における相互性には明らかな利点があります。「共に決定を下す夫婦では、妻たちが自分たちを最も幸せな20％の結婚に数える割合は、最も不幸な20％に数える割合の4倍以上にのぼ

る。さらに彼女たちは、性生活において頻繁にオーガズムを経験する可能性が67％高い。」[25] これらの調査結果は、最良の結婚（そして最良の性生活を伴う結婚）とは、問題が意識して共に解決され、意見が一致しないときには合意に達するために必要な時間と注意が払われる結婚であることを裏づけています。

たとえば十人から成る指導チームのリーダーが、時として最終的な決定者として機能しなければならないことは理解できます。しかし私たちは、企業の意思決定の力学を、たった二人から成る結婚に持ち込むことには用心すべきです。結婚している二人は、機能的なレベルよりもはるかに人格的なレベルで結ばれており、魂の交わりへと献身しているのです。

さらに言えば、夫婦が、合意に達する時間もないまま重要な決定を下さなければならない状況に陥ることが、いったいどれほどあるでしょうか。たいていは、決めるのに十分な時間があるものです。あるいは、夫婦はその分野で最も強い確信を持っているか、最も専門知識のあるほうのパートナーを信頼します。それでも夫婦の意見が一致しないなら、それは二人ともそれぞれ自分の意見に確信を持っているということを示しています。意見の隔たりが最も大きいまさにその時に夫が自分の意志を押し通すというのは、私には最悪の解決策のように思えます！ 夫婦がこの問題を、合意に達するまで話し合う方法はないのでしょうか。はっきりするまでは話し合いを続けるほうがよく、その間、夫も妻も祈りのうちに最善の解決を求め、他の人々の助言を求め、相手に本当に耳を傾けるよう努めるべきです。[26]

私の経験は私を次の結論へと導きます。妻が私に反対するほど強く確信している意見を持っている、まさにその時に私が自分の権威を行使するなら、それは関係を妨害することに等しいのです。妻から切り札を出すように頼まれたことが五回あったと記憶しているアラン・フロウ（Alan Frow）とは違って、私が覚えているのは、ジュリー（Julie）が迷っていたにもかかわらず私が重要な決定を下した、たった一度のケースだけです。しかしその具体的なケースにおいてさえ、彼女は私の権威をただ受け入れたというよりも、むしろ私の確信を信頼したのでした。こうして考えてみると、彼女の意見に反して最終決定を下そうとしたものの、彼女から強い反対を受けたという場面がほかにもたくさんあったことを思い出します。幸いなことに、私は毎回彼女の言うことに耳を傾け、私たちは最終決定を先送りしました。振り返ってみると、彼女のもっともな懸念を押し切って自分の権威を主張しようとしていたら、私は彼女の信頼を壊してしまっていたと思います。

つまり私が言いたいのは、見解2に対して深刻な疑いが生じたということです！ 年を重ねるほど、そして牧師として、また友人として多くの夫婦に寄り添うほど、これらの懸念を無視することは難しくなっています。私は次のような結論に達しました。ジュリーと私が神の前で結婚生活をどのように送るか、そして子どもたちに、配偶者をどのように扱い、配偶者からどのように扱われるべきかをどのように教えるかは、きわめて中心的なテーマなので、「決定票」の見方の弱点にさえ目を向け、エペソ人への手紙5章についての他の可能な解釈に心を開いておくほうがよい、と。そうしたとき私は、エペソ人への手紙5章のような難しい箇所をただ表面的に読むのではなく、より深く掘り下げ、テキストが何を語っているかだけでなく、なぜそう語っているのか、そしてもともとだれに向けられていたのかを問うことの喜びを再発見しました。

見解3：対等なパートナーに仕える者としての夫

この第三の見解に詳しく取り組む前、私はそれが、エペソ人への手紙5章の明白な教えを回避しようとするまったく明らかな試みだと思い込んでいました。その背後には聖書テキストを解釈によって「ねじ曲げ」ようとする努力がある、と推測するフロウに、私は同意していたことでしょう。ついにこの見方に詳しく取り組んだとき、それが実際に説得力のあるものであることに気づいて私は驚きました――釈義上の曲芸などではなく、しっかりとした解釈に必要とされる、どうしても欠かせない骨の折れる細かな作業の成果だったのです。神学者フィリップ・ペイン（Philip Payne）は、エペソ人への手紙5章についていくつかの観察をしており、それによれば、パウロは実際には――表面的に読むと推測されるような――指導と服従ではなく、平等と相互性を結婚の基礎として目指していた可能性がきわめて高いのです。

まず、パウロはキリスト者の結婚を、互いに従い合うことという文脈の中に置いています。ペインによれば、「従う」（「他の人の下に自分を置く」という意味で）という語と、相互性を表す「互いに」（ギリシア語 ἀλλήλοις, allelois）という表現とを結びつけたことは、パウロの教えの中で社会的に最も革命的で、言語的に最も創造的なものの一つです。新約聖書において「従う」（ギリシア語 ὑποτάσσω, hypotasso）という語は、たいてい他の人の権威に服することを意味します。しかしパウロは、それを「互いに」と結びつけることによって、この服従を相互的なものにし、それによってその意味を、他の人の権威を認めることから、その人に仕えるために自分を差し出すことへと移しているのです。 これはまさに、パウロが以前エペソのキリスト者たちに書いたことに一致しています。彼らは「愛をもって互いに耐え忍び」（4:2）、「互いに親切にし、優しい心で」あり、「互いに赦し合う」（4:32）べきなのです。パウロがそのために挙げている理由は、私たちが「キリストを畏れて」（5:21 ELB〔エルバーフェルト訳、ドイツ語聖書翻訳〕）互いに従い合う、ということです。これは章の初めを指し示しています。そこでは、キリストがご自分を私たちに仕えるために差し出されたことが描かれています。「キリストは私たちを愛して、私たちのためにご自分を……ささげ物、またいけにえとして、神への芳ばしい香りとして献げてくださった」（5:2）。

見解1を支持する筋金入りの補完主義者たちは、これに反論しています。ウェイン・グルーデム（Wayne Grudem）もケヴィン・デヤング（Kevin De Young）も、相互的な意味――すなわち、夫もまた妻に従うべきだということ――を論駁しようとしています。彼らは、「互いに」は「ある人々が他の人々に」という意味にもなりうる、と言います。たとえばグルーデムは、「人々が互いに殺し合う」（黙示録6:4）という表現でのこの語の用法を指摘し、これは「ある男たちが他の男たちを殺す」ことを意味すると言います。しかし、もし黙示録の著者が、単に、ある男たちが自分は殺されることなく他の男たちを殺す、という意味で言っていたのであれば、彼は「互いに」という語をまったく用いなかったでしょう。デヤングは、「互いに」[27]という表現が用いられている他のテキストを挙げ、彼の考えではそれらは相互性を含んでいないと言います。しかしよく見てみると、それらは確かに相互性を含んでいます。エペソ人への手紙や新約聖書全体における「互いに」の他のすべての用法と同じようにです。「互いに」従うことを一方向にだけ（下位の者から権威者へと）流れるものにしようとするグルーデムとデヤングの試みは、失敗しています。ジョー

ジ・ナイト（George Knight）やトム・シュライナー（Tom Schreiner）のような指導的な補完主義の神学者たちでさえ、この点では異なる意見を持っています。[28]

第二に、パウロは妻たちにどのような種類の服従を期待しているかを明確にしています。すでに述べたように、服従には二つの種類があります。一方には、たとえば市民が政府に対するような、下位の者が権威に対して行う従順な服従があります。[29] そしてもう一方に、仕える服従があります。私たちが見てきたように、パウロが互いに従い合うことについて語るとき念頭に置いているのはこちらです。[30] 前者は一方的なもので、要求することができます。後者は相互的でありうるもので、常に自発的なものです。

パウロが妻たちに夫に従うようにと言うとき、彼はどちらの種類の服従を意味しているのでしょうか。この問いに対する私たちの答えは、どの翻訳を使うかによって変わってきます。どれでもよいので［ドイツ語の］聖書を開いてみると、21節の終わりに句点があり、そこから完全に新しい段落が始まっているのがわかります。いくつかの翻訳は、21節と22節の間に、たとえば「神の生活秩序における夫と妻」（SLT〔シュラッター訳、ドイツ語聖書翻訳〕）のような見出しさえ挿入しています。しかし、この段落の切り替えや挿入された見出しは、非常に重要なことを覆い隠してしまいます。ギリシア語では、21節と22節の間に句点はないのです。

実際――そしてこれには私も打ちのめされたのですが――、私たちが持っている最古のギリシア語写本では、22節に「従う」という語はまったく出てきません。その理由は、22節が21節の動詞を引き継いでいるからです。[31] ギリシア語本文は文字どおりにはこうなっています。「キリストを畏れて互いに従い合いなさい、妻たちは［欠けている語に注意］自分の夫たちに……」。言い換えれば、パウロがここで妻たちに夫に従うようにと言うとき、彼はすべての信者が互いに示すべきなのとまったく同じ種類の服従について語っているのです。 彼はここで、妻たちが特別な仕方で夫に服従すべきだと言っているのではありません。むしろ彼は第二の種類の服従［仕える服従］について語っているのであって、そこでは妻たちが、へりくだって夫に仕え、夫に良いことをすることを自ら選ぶのです。彼は同じ文の中で最後にもう一度「従う」という語を用い、教会がキリストに従うことを指し示しています。21節と22節における「従う」という語の用法を背景にして、私たちはこれを次のように読むべきです。「教会がすべてのことにおいてキリストにへりくだって仕え、キリストに喜ばれるように生きるように、妻たちもすべてのことにおいて夫にへりくだって仕え、夫に喜ばれるように生きるべきです」（24節）。[32]

第三に、この場合の「かしら」（ギリシア語 κεφαλή, kephalē）は、おそらく権威ではなくいのちの源を意味しています。現代のドイツ語では「Haupt」（かしら）は比喩的に権威を表します――CEOは企業の「かしら」であり、指揮官は部隊の「かしら」です。さらに、文字どおりのからだの文字どおりの頭を思い浮かべるとき、私たち現代人は、脳を含む頭がからだの司令塔だと考えます。頭は神経系を通してからだに命令を送るのです。

私たちは、パウロが kephalē という語を選んだとき何を意味していたのか、そして彼の最初の読者たちがそれをどう理解したと思われるのか、と問わなければなりません。補完主義の神学者たちは、パウロはかしらであるキリストを夫と比べており、それによって夫の権威を意味している、と論じます。しかしそこで見落とされているのは、パウロがこの語を比喩として用いるとき、

おそらくその意味をまったく念頭に置いていないということです。確かに、パウロはイエス・キリストが教会と被造物に対して権威を持っておられることを理解していました。しかし彼がイエスをからだの kephalē と呼ぶとき、彼はたいてい、権威と関連してはいても、まったく同じ意味ではない何かを強調しているのです。ぜひお読みいただきたい付録3「kephalē（かしら）の意味」で、私は、グルーデムの主張とは反対に、パウロの時代にこの語が通常は権威を意味していなかったことを説明しています。

パウロはエペソ人への手紙5章でこの語にどのような意味を与えているのでしょうか。最も重要な手がかりは、彼がこの語を結婚との類比の一部として用いているということです――しかもまったく新しい言語的創作としてです。夫は、そのからだである妻のかしらです。「かしら」を表すギリシア語は、夫と妻の関係との関連では二回しか用いられていません（ここと、コリント人への手紙第一11章3節です）。言語学者たちの間では、どちらの場合のこの語の意味についても意見が分かれています。私は第6章で、コリント人への手紙第一においてはそれが尊ぶべきいのちの源を意味するという立場を論じています。かしらとからだという比喩との関連でこの語が用いられているのは、エペソ人への手紙5章だけです。パウロは、「そのからだである妻のかしら」で何を意味しているのかについて、何か手がかりを与えてくれているでしょうか。

はい、与えてくれています！ 23節のもとのギリシア語の文の構造は、残念ながらほとんどの翻訳で失われてしまっていますが、次のようになっています。「夫は妻のかしら、……キリストは教会のかしら、ご自身がからだの救い主。」ギリシア語では、パウロが「かしら」で何を意味しているかが見て取れます。これら三つの並行する表現は、パウロが「かしら」を「救い主」と同義に用いていることを明らかにしています。もしパウロが夫の権威を強調したかったのであれば、そのための多くのギリシア語の一つを用いることができたはずです。kyrios（主）、exousia（権威）、あるいは proestōtes（指導する）です。ところが彼はかしらとからだの比喩を選び、それを、ご自分のからだの救い主として（この場合は主としてではなく）ご自身を献げるキリストになぞらえているのです。神学的に見れば、キリストは救い主であると同時に主でもあります。しかしパウロはこの類比の中に、ご自分のからだの救い主としてのキリストの意味だけを込めているのです。ここで夫のかしらとしての立場が夫の配慮と奉仕を意味していることに疑いを抱くなら、配慮と奉仕という考えが続く節にも再び見いだされます。ただしそれは、パウロがもう一つの比喩、すなわちキリストとその花嫁である教会との婚姻という比喩を織り込んでいるために、いくらか覆い隠されています。

キリストは彼女［ご自分の花嫁／ご自分のからだ］のためにご自身を献げられました。それは、彼女［ご自分の花嫁／ご自分のからだ］をみことばによる水の洗いできよめたうえで、彼女［ご自分の花嫁／ご自分のからだ］を聖なるものとするためであり、また彼女［ご自分の花嫁／ご自分のからだ］を、しみやしわや、そのようなものが何一つない、聖なる、傷のない栄光の教会として、ご自分の前に立たせるためでした。同じように、夫たちも自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分自身を愛しているのです。だれも自分の身を憎んだ者はいません。むしろ、主が教会にそうされたように、それを養い育てるのです。

おわかりでしょうか。この箇所全体を通して、パウロは権威にではなく、奉仕と配慮に重点を置いているのです。 夫は妻のかしらであると彼が言うとき、それは夫たちが妻に対して権威を行使すべきだという意味ではありません。それは、私たち一人ひとりが自分のからだに仕えるように、夫たちは妻に仕えるべきだという意味なのです。

パウロは21-30節でこの三重の比喩（かしらとからだ、夫と妻、キリストと教会）を展開した後、さらにもう一つの層を加えています。それは堕落前のアダムとエバの一致です。これは彼が描いている像を確かに複雑にしますが、すばらしい考えを表しています。「『それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。』この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです」（31-32節）。夫がかしらであり、妻がからだの残りの部分であるという類比によって、パウロは、アダムとエバの間の最初の結婚、すなわち二人が初めて比喩的な「一体」としての一致を享受したときを振り返っています。すでに第4章で見たように、この結びつきは権威と服従に関わるものではなく、喜びに満ちた親密さとパートナーシップに関わるものでした。ですから、エペソ人への手紙5章でかしらとからだの比喩を用いるとき、パウロが強調しているのは指揮命令系統ではなく、愛の絆なのです。

神は夫に、妻を導くのではなく妻に仕えるよう呼びかけておられる、というエペソ人への手紙5章の読み方から得られる最後の洞察を、もう一つ付け加えたいと思います。この箇所には、妻を導くようにという夫への指示は一つもありません――ここにも、聖書全体のほかのどこにも！ この文をどうぞもう一度読んでみてください。これは解釈を根本から変えるのです。

これらすべてから、私たちは重要な結論に導かれます。エペソ人への手紙5章は、もしかすると、自分に従う妻に対する夫の権威について語っているのではまったくないのかもしれません。むしろパウロは、生き生きとした比喩を通して、夫と妻が愛をもって一つに結ばれ、互いに仕え合い、互いに良いことをすべきだと強調しているのです。

それは、パウロが夫と妻に、互いをまったく同じ仕方で扱うよう求めているということでしょうか。

そうでもあり、そうでもありません。そうだというのは、両者が「互いに従い合う」よう呼びかけられているからです。そしてここでは夫たちにだけ妻を「愛する」ようにと言われていますが、それでも両者は互いに愛し合うべきなのです――別の箇所でパウロは、妻たちに「夫を愛する」ようにとはっきり求めています。[33] しかし、そうではないとも言えます。なぜならパウロは、ギリシア・ローマ世界の教会の非常に多くの結婚の中に見てきたパターンを念頭に置いているかもしれないからです。たとえば、夫が kephalē、つまりいのちの源として描写されているのであって、そうなるよう求められているのではない、という点に注意してください。パウロはおそらく、古代において妻たちはたいてい夫より若く、教育も受けていなかったという事実に触れているのです。妻たちは子育てに追われ、そのため経済的にも物質的にも夫の扶養に完全に依存していました。依存している妻を kephalē と呼んでも、意味をなさなかったでしょう。

それに加えて、もしパウロの時代の夫たちが、今日私が知っている多くの夫たちとだいたい同じようであったとすれば、彼らは（平均して）妻たちよりも、配偶者のために自分の人生を犠牲にする用意ができていなかったでしょう。[34] そのためパウロは、妻たちには夫に従うように、つま

りへりくだって夫に仕え、夫に良いことをするように言うだけで十分だと考えているのです。それから彼は、夫たちに三倍もの言葉を費やし、キリストのように犠牲を払うよう迫ることによって、夫たちの自己中心を揺さぶりにかかります。これは確かに私に当てはまります。私の結婚において、聖書と聖霊の絶え間ない働きによって、配偶者に自己犠牲的に、へりくだって仕え、良いことをするよう最も促される必要があるのは、ジュリー（Julie）ではなく私なのです。私の友人アンドリュー・バートレット（Andrew Bartlett）が次のように結論づけているのは正しいと思います。「パウロは夫に、自己献身において先頭に立つよう求めている。それは、夫を無私の心で愛するという妻のキリスト者としての義務と根本的に異なるものではないが、愛するという夫の責任を強めるものである。」[35]

33節でパウロは、夫たちには妻を「愛する」（導くのではなく）ようにとはっきり求め、妻たちには特に夫を「敬う」（夫に従うのではなく）ようにと勧めています。なぜ彼は妻たちには夫を敬うように、夫たちには妻を愛するようにと求めているのでしょうか。当時も今も、たいていの妻は敬われることも望み、たいていの夫は愛されることを願っていたとしても、パウロはおそらく、彼の時代の多くの男性と女性の異なる心理について何かを知っていたのでしょう。

見解3、すなわち対等な相手に仕える者としての夫を描いていると、私はこの見方の力を感じます。正直に言えば、私はこれが正しい解釈であってほしいと願っています。私はそれをとても励まされるもの、挑戦的なものだと感じているからです。夫が日々の決定を下す者であるというグルーデム（Grudem）の見方（私はこれを悪いものだと考えています）や、夫がまれな状況で決定票を投じるというケラー夫妻（Keller）の見方（私はこれをより良いものと考えますが、それでもなお問題があり、そのうえ首尾一貫していないと考えています）とは対照的に、私はこの見方を良いもの、そしてきわめて実践的なものだと思います。

しかし、もしパウロがこの箇所で、エペソの妻たちは夫の中に何らかの種類の権威を認めるべきだと、実際にほのめかそうとしていたとしたらどうでしょうか。たとえ彼が、夫たちに愛に満ちた自己犠牲を呼びかけることによってそれを再び釣り合わせているとしてもです。結局のところ、少なくとも、結婚を神の婚姻――そこでは神／イエスと私たちとの間に確かに序列の違いがあります――になぞらえていることは、夫婦関係における階層を思わせます。この箇所を正しく理解しようと心に決めて、私はさらに考えを巡らせました。聖書解釈の重要な原則のすべてをこの課題に当てはめただろうか、と自問しました――そして、そうしていなかったことに気づいたのです。

見解4：贖われたPaterfamilias（家長）としての夫

すでに述べたように、聖書を理解し適用しようとする努力の中で私たちが犯す最もよくある誤りの一つは、聖書のさまざまな部分が直接私たちに向けて書かれたものだと思い込むことです。しかしそうではありませんでした。それらは私たちのために書かれたのかもしれませんが、私たちに宛てて書かれたのではありません。 最初の読者たちの状況を理解し、彼らがそのことばをどう理解したかを知ってはじめて、まったく異なる状況や文化の中に生きている私たちは、テキストから自分たちにとっての意味を引き出し始めることができるのです。多くの、いやたいていのテキストでは、今日の私たちの状況は最初の読者たちの状況と比べることができるので、この作業

は容易になります。しかし、彼らの状況が私たちの状況と非常に大きく異なる場合はどうでしょうか。

今日のキリスト者は、（たとえば言語、文化、生活状況における）違いという「川」によって、聖書の聴衆から隔てられています。この川のために、私たちは彼らの文脈における意味から、私たち自身の文脈における意味へと直接移ることができません。私たちは確かに同じ大きな物語の一部ですが、その物語の中での私たちの位置は、しばしば霊的な先祖たちの位置とは異なっています。時には川の幅が広く、それを渡るには長い橋が必要です。時には川は細い小川で、簡単に渡ることができます。テキストに含まれている原則を私たちに適用できるようにするために橋を架けようとする前に、私たちは川の幅がどれほどあるのかを知らなければなりません。[36]

この解釈の鍵をエペソ人への手紙5章の研究に当てはめたとき、私は自分の誤りに、そしてこのテキストについての論考を私が読んだほとんどすべての人の誤りに気づきました。私たちは、エペソ人への手紙5章を簡単に渡れる細い小川だと思い込んでいるのですが、実際には、渡るのに長い橋を必要とする広い川なのです。

説明させてください。私たちは、エペソの教会の夫婦は多かれ少なかれ現代の夫婦と似ていたと思い込んでいます。パウロが私たちと私たちの今日の結婚を「見て」、それゆえこの手紙を私たちに書いていると想像しているのです。しかし実際には、彼は一世紀のギリシア・ローマ世界の結婚について語っているのであり、それは私たちの結婚とは大きく異なっていました。その世界では、家庭は共働きの両親二人と子ども二人、犬一匹と猫一匹から成っていたのではありません。たいてい家庭は、一人の男性、すなわち paterfamilias（家長）から成り立っており、彼が妻と子どもたち、そして時には奴隷たちを支配していました。アリストテレス（Aristoteles）の教えによれば、家庭は階層的に組織されていました――それがあの文化において家を治める最善の方法だったのです。（成人の男性がいない場合にだけ、妻が家の支配者になりました。）私はあえて「支配者」と言います。アリストテレスは「家の支配は君主制である」[37]と言いました――夫であり父である者が王だったのです。

前の段落で子どもたちと奴隷たちに触れたとき、あなたがたも私と同じように何かに気づかれたかもしれません。エペソ人への手紙5章22-33節の夫と妻の関係は、パウロが取り上げる三つの関係の組の最初のものです。続く二つはそのすぐ後に続きます。親と子（6:1-4）、そして主人と奴隷（6:5-9）です。私がそれまで見落としていたのは、パウロがこれらの多層的な古代の家庭に福音を当てはめているということでした。それらの家庭は、夫、妻、子どもたち、奴隷たちの階層から成っていました。夫たちは、妻たちには与えられていない権利と特権と自由を持っていました。[38] 彼らは権力を持ち、収入の大部分をもたらしていました。たいていの場合、女性は、自分の名において行動してくれる男性なしには、財産を所有することも、商売をすることも、法的・金銭的な取引を行うこともできませんでした。

地中海社会では、平均的な結婚年齢は男性で三十歳、女性では十八歳かそれ以下でした。男性が結婚するとき、彼はたいていすでに世慣れた人物で、社会の中でどう生きるかを知っていました。彼は社会的にも経済的にも行為能力のある人物でした。それに対して女性はまだ少女であり、ノックの音がしても玄関に出ることさえ許されていませんでした。典型的な女性は、子どもを

産める年齢の間、およそ二年ごと、あるいは三十か月ごとに子どもを産みました。彼女はいつも「裸足で妊娠中」であり、家の中にいました。前の子が乳離れするとすぐに、彼女は再び妊娠したのです。[39]

たいていの女性は、家事以外の教育を受けませんでした。彼女たちは生涯を通じて完全に依存しており、一人の男性――父親、あるいはおそらく後見人、後には夫――の支配の下に置かれていました。服従は子どもたち、奴隷たち、そして妻たちにとっての規範でした。この文脈とこの文化においては、paterfamilias は支配を行うべき者であって、だれかにへりくだって仕えるべき者ではありませんでした。ましてや、むしろ paterfamilias に仕えるべきであった自分の目下の者たちに仕えることなど、なおさらでした。アリストテレスもそのように見ていました。「男性は生まれつき女性よりも命令するのに適している……。この不平等は永続的なものである……。男性の勇気は命令することに、女性の勇気は従うことに表れる。」[40]

次のことに注意してください。パウロは、最年長の男性が他のすべての者を支配するような家庭の構造を作り出しているのではありません。それは、カエサルがローマ帝国の支配者であるような統治の構造を定めているのではないのと同じです。彼はこれらの状況に言及しているだけであり、既存の社会構造の中で、それらを一気に覆そうとするのではなく、それらを改善する道を見いだすことによって活動しようと努めているのです。 今日新しい文化に入っていくあらゆる良い宣教師と同じように、パウロはできるところでは適応しました。たとえそれを必ずしも理想とは見なしていなかったとしてもです。

福音が古代の家庭と出会う

もしあなたがたがパウロの立場にいたなら、自分の教会の中のこうした階層的に構成された家庭に、どのような助言をしたでしょうか。パウロがエペソの家庭に、当時の文脈の中で助言する際に用いている三つの戦略を見てみましょう。

第一に、パウロは家庭内のすべての関係を福音の旗印の下に置いています。彼は妻たちと夫たちに、「キリストを畏れて」互いに接するよう導き、すべての指示をキリストに関連する言い回しの中に埋め込んでいます。「主に従うように」「キリストが……のように」「キリスト」「キリストも……ように」、そして「私は、キリストと教会を指して言っているのです」。彼は同じアプローチをとって、親と子、主人と奴隷にも、互いの関係を新たに考え直すよう促しています。感覚的には二語に一語が「キリスト」か「主」です。パウロは巧みに、すべての人――妻たちと夫たち、子どもたちと親たち、奴隷たちと主人たち――が、他の人との関わり方を、自分とキリストとの関係の表れとして見ることができるよう助けようとしているのです。

第二に、パウロは paterfamilias たちの自己中心的で横柄なふるまいをはっきりと糾弾しています。家庭内の役割を定めていた古い法典では、paterfamilias たちには支配するようにと言われ、他のすべての者には服従するようにと言われていました。これらの法の重点は、たいてい、自分のふるまいを律しなければならない目下の者たちに置かれていました。しかしパウロが改善した「法典」は、かつてなかったことをしています。それぞれの関係において、最大の注意を夫たち／親たち／主人たち（三つの場合すべてで同じ男性が関わっているのです！）に向け、彼ら自身

のふるまいを変えさせようとしているのです。paterfamilias が文化的な状況のためにいずれにせよ支配しているということを前提として、パウロは彼に、今や妻のために自分のいのちを献げ、子どもたちを怒らせず、奴隷たちを脅さないようにと求めています。これは当時、確かにまったく画期的な要求でした。夫が妻の生殺与奪の権を握っていた文化の中で、パウロは夫たちに、自分の権力を手放し、必要なら妻たちの幸せのために死ぬことさえするようにと求めているのです。

第三に、パウロは福音を用いて、paterfamilias への妻、子どもたち、奴隷たちの服従を和らげ、新たに秩序づけています。彼らに反乱を呼びかけることなく、彼は、福音が彼らの状況の中でどのような種類の服従を生み出しうるのかを示唆しています。妻にとってそれは、私たちが見てきたように、夫の権威にしぶしぶ服従するのではなく、キリストにもへりくだって仕え、キリストを喜ばせたいと願うのと同じように、夫にへりくだって仕え、夫を喜ばせるべきだということを意味しています。

パウロの教えは驚くべき実を結びました。

paterfamilias を厳しく戒め、それから家父長制社会の最も弱い者たち――妻たち、子どもたち、奴隷たち――に愛をもって向き合うことによって、パウロは、初代教会が力のない人々を大勢引きつけるようにしたのです。異教の批判者ケルソス（Celsus）は、二世紀に教会をあざけってこう言いました。「キリスト教は女と子どもと奴隷の宗教だ。」[41]

家庭内の関係についてのパウロのアプローチは、当時の文化にとってまったく新しいものでした。彼は古い階層を廃止はしませんが、それを神の理想として維持しようともしません。むしろ彼はそれを掘り崩し、その構造全体が福音の中に埋め込まれるだけでなく、ついにはその中で解消されていくようにしているのです。私たちの時代にも実際にそうなったようにです。

しかし当時の古代においては、キリスト者の家庭を訪れた異教徒のだれ一人として、パウロがローマ法を掘り崩そうとしているとか、単純な平等主義の家庭構造を導入しようとしているとは思わなかったでしょう。その人が贖われた paterfamilias について気づいたであろうことは、第一に、彼が自分の導く人々を愛をもって世話し、彼らのために自分を犠牲にする、その並外れたあり方であり、第二に、彼の妻と子どもたちと奴隷たちの明るさだったでしょう。

パウロが無制限の平等主義を教えていると考える見解3とは異なり、この見解は、パウロが夫を妻のかしらと呼ぶとき、夫が妻に対して権威を持つという文化的規範を認めている、と考えます。さらに、彼が夫と妻の関係をキリストと教会の関係になぞらえるとき、それは、一方が他方に「責任を負っている」ことをほのめかしている、という意味でありうることも十分考えられます。しかし、たとえ彼が Paterfamilias が責任を担っていることを前提としているとしても、彼はそれを、夫があらゆる時代、あらゆる文化において妻に対して占めるべき一種の「役割」や地位として定めているのでは決してありません。それどころか、男性が女性に対して持つ文化的な権力を理想として示すことからはほど遠く、パウロはそれを福音によって和らげようと努めているのです。

ジョン・パイパーの議論への反論

一部の補完主義者たちは、次のような反論を持ち出します。パウロが夫の権威を認め、それをキリストと教会との関係に結びつけていると考えるなら、パウロは夫と妻の指導と服従をまさに理想として宣言しており、したがってそれを永続化している、というのです。パイパー（Piper）は、贖われていると同時に階層的でもあるキリスト者の結婚は、世に福音を目に見える形で示すと言っています（そしてそれについて一冊の本を書きました）。彼はこう書いています。「従順で依存している妻に対する夫の愛に満ちた指導は、キリストと教会の姿を表している。夫がその指導的役割を失うなら、もはやそうではなくなる。」[42]

彼の議論は三つの点で誤っています。第一に、パウロは家庭内の奴隷制についても同様のことを言っています。奴隷たちに、自分たちの主であるキリストに従うように、主人に従いなさいと言うときです。パイパーの論法に従えば、神は、私たちの主イエスへの私たちの服従の「美しさ」を世に示すために、主人と奴隷の関係を造られたことになってしまいます。そんなことはありません！ どちらの場合も、パウロは、現実のものではあっても必ずしも理想的ではない状況に福音を当てはめているのです。

第二に、福音を描き出すのは、結婚における階層ではなく、そのような結婚の贖いです。パウロがこの箇所で強調しているのは階層ではなく、互いに従い合う中で夫に身をゆだね、夫が親密な関係を育んでいる妻に対する、夫の奉仕です。これは、階層的な結婚よりも、相互性に基づく結婚においてこそ、確かによりよく表現されうるのではないでしょうか。見解3のところで述べたように、パウロは、イエスを教会の主としてではなく、教会の救い主、また保ち支える方として強調することによって、kephalē という語の用法を明確にしているのです。

第三に、もし神が結婚によって、教会に対するイエスの支配を世に明らかにしようとしておられると考えるなら、どんな階層的な結婚も決して十分に階層的ではありえません。イエスはご自分の教会の主ですが、夫は決して妻の主ではないのです。

パイパーの議論の弱点にもかかわらず、私は、キリスト者の結婚が福音の何かを映し出すべきだという点では、彼に同意します。 キリスト者の結婚は、あらゆるキリスト者の共同体と同じように、イエスが私たちを愛してくださったように互いに自己犠牲的に愛し合うことによって、私たちがイエスの弟子であることを世に示すことができます。相互性に基づく結婚は、階層的に構成された結婚と同じように、いや、それ以上にうまくそうすることができます。キリスト者の結婚は、もう一つのことをもよく映し出すことができます。私たちがキリストと持っている、永続的で親密な結びつきです。パウロが用いている、彼が「一体」と呼ぶかしらとからだの類比は、深く愛に満ちた契約関係と、生き生きとした有機的なつながりを指し示しています。指導者が部下たちから離れるという考えはそれほど奇異ではありませんが、頭がからだから切り離されるという考えは、心底ぞっとするものです。

エペソ人への手紙5章で私たちが誤っている点

800頁に及ぶ著書の中で、グルーデムは結婚における妻の服従を激しく論じていますが、一世紀の結婚と今日の結婚との間の巨大な違いには一度も触れていません。[43] ケラー夫妻についても同じ

ことが言えます。エペソ人への手紙5章についての詳細な研究の中で、彼らはこの側面にまったく注意を払っておらず、当時の結婚の状況にも触れていません。ただの一度もです。これは誤りです。彼らは広い川を細い小川のように扱っているのです。

パウロの関心は、古代の家庭構造を不滅のものにすることにはありません。むしろ彼は、私たちの状況とは大きく異なる独特な文化的状況に福音を当てはめているのです。パウロは私の世界に語りかけていたのではありません。私の世界では、成人女性の大半が男性と同じように教育を受けており、自分の出産をコントロールし、経済的に自立しており、男性が自分の上に立つことの社会的必要性はありません。これらすべてが、別の種類の結婚を可能にしているのです。

次の問いはこうです。彼らの状況と私たちの状況の間に非常に広い川があることに気づいた今、テキストに含まれている原則を私たちに適用できるようにするために、私たちはどのようにしてそこに「橋」を架けることができるのでしょうか。あるいは、別の問い方をすれば、もはや厳格に階層的ではなく平等主義的である、私たちの社会の今日の結婚に対して、パウロは何と言ったでしょうか。私は次のように提案します。

パウロは私たちに、結婚においてキリストを中心に置くべきだと言うでしょう。互いを「見る」仕方、互いに接し、協力し、互いを敬う仕方は、キリストとの第一の関係によって形づくられるべきです。私たちは互いに従い合い、自分の独立性と自己中心を捨て、エデンの園で堕落前に生きられていたような、親密な「一体」の関係を目指すべきです。もし、男性は平均して女性よりも独立的で、それゆえより自己中心的であり、女性は平均して男性よりも関係志向的で、それゆえより他者に向かっていると考えるなら、私のような夫は、何よりもまず、教会に対するキリストの自己犠牲的な愛について特に思い巡らすべきでしょう。その愛は、キリストの花嫁が輝くばかりに花開くことへとつながるのです。

当時の文脈と今日の私たちの文脈との明らかな違いに気づいた今、私はどうしても想像できないのです。夫と妻の年齢がより近く、二人とも同じように教育を受け、もしかすると二人とも働いていて、子育てに携わっている平均的な現代の夫婦に対して、パウロが次のように言うとは。「パートナーシップを結んでいるのはよくやっています。その調子で続けなさい！ しかし私は、夫が指導的役割を担い、妻は夫に服従すべきだと主張したい。」アダムとエバのもともとの結婚のように、結婚についての創造の理想は一体としての一致、すなわち言葉の完全な意味での真のパートナーシップであると教えている彼が、どうしてそんなことを言えるでしょうか。

これは私個人の意見にすぎないものではありません。広く行き渡った見方であり、それどころかキリスト教の多数派の見解でもあります。すべてのカトリック信徒を拘束する使徒的書簡『Mulieris Dignitatem』（女性の尊厳）の中で、教皇ヨハネ・パウロ2世（Johannes Paul II.）は、妻に対する夫の権威は「古い」ものを反映していると述べています。この書簡は、「当時の慣習と宗教的伝統に深く根ざした」考え方について語っています。それに対して「新しい」もの、「福音による新しさ」とは、「服従が一方的ではなく、相互的である」ということなのです。[44] 教義の面で最も柔軟性に乏しい教派の一つがこのように自らの教えを修正できるのであれば、私たちほかの者もそのことに目を留めるべきでしょう。

もちろん、世界には今でも男性が実権を握っている文化があります。そうした文化にとって、パウロの教えはまるであつらえたもののように思えます。家父長制の社会では、夫はたいてい、女性よりもはるかに大きな社会的・知的・政治的・経済的な力を持っています。そこで夫は、キリストがご自分の優った力を教会の益のために用いられるように、その力を自分を顧みず妻の益のために用いるべきなのです。しかし、家父長制の文化の中で何千人もの夫たちが十分に長くそうするなら、女性たちや妻たちは自らの社会的・知的な力を伸ばし、夫にとって対等なパートナーとなるための備えをいっそう整えていくことでしょう。私の研究はまさにその結論へと私を導きました。見解4、すなわち贖われたpaterfamilias（家長）を、結婚が厳格な上下関係で組み立てられている文化に当てはめるなら、最終的にはそうした文化そのものが変わり、見解3の結婚を促すようになるでしょう。長くキリスト教の影響を受けてきた国々では、すでにそうなっているのです。

もし私たちが、旧約聖書と新約聖書に見られる結婚についての聖書テキストへと研究の範囲を広げていたなら、相互性に基づく結婚を神が好まれることは、初めから明らかになっていたことでしょう。

夫を導く妻たち

旧約聖書に出てくる結婚はすべて家父長制の環境の中で結ばれたものだったことを考えると、妻は夫に従属するものだという文化的前提があったと考えてよいでしょう。だからこそ注目に値するのは、「アダムがエバを支配する」という神の予告を別にすれば、モーセの律法の中にも預言者たちの言葉の中にも、妻に夫への服従を求める命令は一つもないということです。

旧約聖書に残されている、夫婦の力関係を写した小さなスナップ写真のような場面を見ていくと、妻が夫を導いている姿に繰り返し出会います。私は人生の多くの岐路で神に知恵を求め、神が何を語られるかを聞こうと天に耳を傾けてきました。そして、かつて神がアブラハムに語られたことを、神が私にも語られるのを何度も聞きました。「[あなたの妻が］あなたに言うことはみな、その言うことを聞き入れなさい。」[45] 何とすばらしい助言でしょう。私は自分が何を言っているのかよく分かっています。妻はとても多くの場合、神から先に聞くのです。

サムソンの母に起こったことも、まさにそれではないでしょうか。男性が女性に直接話しかけるのはふさわしくないとされていた文化の中で、御使いが男の姿をとって、子を産めない女性に、御霊に油注がれた子が生まれることを告げます。その後、この女性は夫を呼びに行きます。「彼女は急いで走って行き、夫に告げて言った。『ご覧ください。あの日、私のところに来られたあの方が、私に現れました。』」次の言葉に注意して目を留めてください。「[彼は］立ち上がって妻の後について行った。」見知らぬ男が家父長制の規範を破ったことを、もしかするとあまり快く思っていなかったのか、彼はこう尋ねます。「あなたが、この女に話しかけた方ですか。」[46] この物語はさらに、もっと重大な誕生を指し示しています。千年以上のちに、御使いはまずマリアのもとに来て、同じような知らせを告げます。[47] 彼女の夫に知らせるのは、そのあとのことです。[48] どちらの場面でも、これから起こることをまず神から知らされるのは女性であり、男性はそのあとで最新の情報を知らされるのです。つまり、妻がすでに知っていることに追いつくのです。もし

「創造の秩序」のようなものがあったとしても（実際にはありませんが）、神はそれを守っておられないように見えます。

さらにシュネムの女性がいます。彼女は自分から進んで預言者エリシャを迎え入れます。彼女は夫にこう言います。「いつも私たちのところに立ち寄って行かれるあの方は、きっと神の聖なる方に違いありません。ですから、屋上に壁のある小さな部屋を作り、あの方のために寝台と机と椅子と燭台を置きましょう。あの方が私たちのところに来られるたびに、そこに入っていただけるように。」[49] ここでもまた、夫はすぐに妻の言うことに従い、この件についての妻の霊的な判断力を本能的に信頼しています。

ここで一言述べておくべきでしょう。「夫は妻のkephalēである」という言葉は「夫が家庭の霊的なかしらであるべきだ」という意味だ、という解釈が広く行き渡っていますが、残念ながら申し上げなければなりません。この考えには聖書的な根拠がないのです。妻ではなく夫が祈りを導き、家庭礼拝に家族を招き、夫婦や家族がどの教会に通うかを決めるべきだ、と書かれたメモをお持ちなら、捨ててしまったほうがよいかもしれません。夫や父親が家族の霊的な幸いのために決定的な主導権をとることを軽んじるつもりはありません。それでも、夫と妻の両方が、チームとしても一人ひとりとしても、神を求めること、教会を選んでその会員となること、そしてほかの家族の霊的な成長を目指すことに、それぞれ力の限りを尽くすほうがよいのです。夫が家族のほかの者たちの牧師であるべきだという教えへの答えとして、私は、夫と妻が一緒に家族の牧会的な指導チームとなることを勧めます。

男性中心の文化の中で生きながら、家父長制の規範に逆らっているように見えるもう一人の女性がアビガイルです。彼女の非常に裕福な夫ナバルは、「頑迷で、行状が悪かった」人です。[50] 逃亡中で飢えていたダビデとその私兵たちがナバルに食べ物を求めたとき、ナバルは冷淡に彼らをあざけり、その願いを退けます。深く傷つけられ怒ったダビデは、ナバルとその地所にいるすべての男たちを殺そうと計画します。認めざるを得ませんが、これはあまりキリスト者らしい反応ではありません。

アビガイルは夫に従わず、ダビデの殺意についての知らせを夫に伝えないことによって、流血を防ぎます。彼女は食料をろばに積み、ダビデのもとへ向かい、傷ついたダビデの自尊心に巧みに寄り添いながらこう言います。「ご主人様。どうか、あのよこしまな者、ナバルのことなど気にかけないでください。あの人は、その名のとおりの人です。その名はナバルで、その愚かさは彼とともにあります。」[51] 自分の夫がどれほどひどい人間であるかを強調しながらも、彼女はダビデの良心に訴え、あわれみを請います。するとダビデは武器を収めることにします。

アビガイルが家に戻り、自分が夫の命令を覆したこと、そしてダビデがナバルの命を助けたことを話すと、ナバルの心臓は止まり、十日後に彼は死にます。ダビデが人を遣わして彼女を三人目の妻として迎えようとすると、彼女はひれ伏してこう言います。「ご覧ください。このはしためは、ご主人様に仕え、ご主人様の家来たちの足を洗う女奴隷です。」

なんとも突飛な物語ですが、この中には、彼女がナバルとダビデの両方を「ご主人様」と呼ぶことを神が良しとしておられる、と示すものは何もないことに注意してください。二人の男性はどちらもこの称号をためらうことなく受け入れていますが、ここで描かれているのは、適応するこ

とによって家父長制の中を生き延びるすべを身につけた女性だということがはっきりします。それは時に、「男性の権威」に逆らうことさえ意味します。そしてこの箇所では、そのことがほめるべきこととして描かれているのです。むしろここに見られるのは、別の、より公正な文化の中であれば、おそらく有能な指導者になっていたであろう女性の一つの実例です。ダビデは彼女の美しさだけでなく、無用な流血をただちに防いだその戦略的な能力と、人の心をつかむ外交手腕にも心を動かされたのです。

結論：旧約聖書の物語は、妻に対する夫の権威が神の望まれる規範であるという考えを支持していません。

コリント人への手紙第一7章の相互的な結婚

ソロモンの雅歌は、二人の人の間の、愛と恋と性による結びつきの内面的な力関係を扱う、聖書の中で最も長い箇所です。そこには、夫と妻の間の権威と服従の関係を示すしるしはまったくありません。恋愛においても性においても、二人ともが主導権をとり、二人ともが身をゆだね、二人ともが与え、二人ともが受け取ります。この詩の書は、堕落以前のアダムとエバが対等な者同士として互いに味わっていた、裸のままの喜びを思い起こさせるだけではありません。新約聖書の中にもそれと対応するものがあるのです。

コリント人への手紙第一7章は、パウロの手紙の中で結婚を扱っている箇所として群を抜いて長いものです。しかし、キリスト者の結婚における性、奉仕、別離についての指針の中で、パウロは、キリスト者の結婚が、対等な者同士の相互性に基づく愛に満ちたパートナーシップ以外の何かでありうるなどということを、少しもほのめかしていません。実際、この章は、結婚における権威の問題を明確に扱っている聖書の中で唯一の章です。ちなみに、その権威は妻にも夫にも与えられているのです。

神が私たちの結婚のために定めておられる、相互の愛と互いの権威を強調する箇所をいくつか取り上げたいと思います[52]。

夫はそれぞれ自分の妻を持ち、妻もそれぞれ自分の夫を持ちなさい（2節）。

夫は自分の妻に対して、果たすべき愛情の義務を果たし、同じように妻も自分の夫に対してそうしなさい（3節）。

妻は自分のからだについて権利を持ってはおらず、それは夫にあります。同じように、夫も自分のからだについて権利を持ってはおらず、それは妻にあります（4節）。

互いに相手を拒んではいけません。ただし、合意の上で、しばらくの間そうするのは別です（5節）。

妻は夫と別れてはいけません。……また、夫は妻と離婚してはいけません（10-11節）。

信者でない妻を持つ兄弟がいて、その妻が一緒にいることを承知している場合は、離婚してはいけません。また、女の人に信者でない夫がいて、その夫が一緒にいることを承知している場合は、離婚してはいけません（12-13節）。

信者でない夫は妻によって聖なるものとされており、信者でない妻も夫によって聖なるものとされている（14節）。

しかし、信者でないほうの者が離れて行くなら、離れて行かせなさい。そのような場合には、兄弟であれ姉妹であれ、縛られることはありません（15節）。

妻よ。あなたが夫を救えるかどうか、どうして分かりますか。また、夫よ。あなたが妻を救えるかどうか、どうして分かりますか（16節）。

しかし、たとえ［男性である］あなたが結婚しても、罪を犯すわけではありません。たとえ処女が結婚しても、罪を犯すわけではありません（28節）。

独身の男は、どうすれば主に喜ばれるかと、主のことに心を配ります。……独身の女は……主のことに心を配ります（32節、34節b）。

しかし、結婚した男は、どうすれば妻に喜ばれるかと世のことに心を配り……結婚した女は……世のことに心を配ります（33-34節a）。

コリント人への手紙第一7章から、結婚についての神のご計画について何が分かるでしょうか。リチャード・ヘイズ（Richard Hays）はこう言います。「パウロの答えは……1世紀の読者たちには驚くべきものに映ったに違いない。夫婦は互いに上下関係にあるのでもなければ、それぞれが好きなことをする自律した存在でもない。そうではなく、結婚とは相互に従い合う関係であり、その中でそれぞれのパートナーは相手のものとなるのである。」[53]

初めて人々に結婚相手の選び方について助言したとき、私はその決断を神にゆだねるよう勧めました。ところがある日、コリント人への手紙第一7章を読んでいて、このテーマについての新約聖書の中で唯一の明確な教えを読んだばかりだということに気づきました。「自分が願う人と結婚する自由があります。ただし、主にある結婚に限ります」（39節）。そこから学べることは何でしょうか。私たちは選ばなければならないのです。それも、よく考えて。そして今回コリント人への手紙第一7章を読み直したとき、私は似たようなひらめきを経験しました。夫婦が大切な決断を――たとえば、いつ性的な交わりを持つか、いつ一緒に神を求めるかを――どのように下すべきかについて語っている新約聖書全体で唯一の節は、こうなっています。「互いに相手を拒んではいけません。ただし、合意の上で……」（5節）。そこから学べることは何でしょうか。夫婦が対等なパートナーとして一緒に決めるよう心がけているなら、夫が命令を下したり、最終的な決定を下したりする必要はないのです。

結論：コリント人への手紙第一7章は、妻に対する夫の権威について明確に語っている唯一の章です。しかし、それは夫に対する妻の権威についても語っているのです。この章は結婚において、男女の平等と、互いに従うこと、そして合意を決定の基礎とすることを推し進めています。

聖霊によって権威づけられた聖書の一体性を考えるなら、コリント人への手紙第一7章は、エペソ人への手紙5章についての私たちの解釈を方向づけることができますし、またそうすべきです。ですから、名の知れた補完主義の著者たちのほとんどが、コリント人への手紙第一7章について、それが自分たちの解釈と実際には矛盾していることには目をつぶって軽く触れるだけか[54]、あるいは

――こちらのほうがよくあることですが――この箇所をまったく無視しているのは奇妙なことです。[55]

では、どの見解が正しいのか

エペソ人への手紙5章の解釈についてのこの章の締めくくりとして、四つの見解のうちどれが私たちの結婚と教会において優先されるべきかという問いを考えてみたいと思います。

私は、見解1（決定権者としての夫）を退け、それをその本当の姿、すなわち抑圧的な神学と呼ぶべきだと主張します。

見解2（最終決定者としての夫）は、ジュリー（Julie）と私の結婚において長年、途中の停留所の役目を果たしてくれました。そのことに私は感謝しています。しかし、それに伴う問題点の分析、見解3と見解4の釈義上の優位性、そして結婚というテーマについての聖書のより包括的な読み方を考え合わせると、おそらくこの見解も手放すべきでしょう。

では、残る二つの見解のどちらを選べばよいのでしょうか。

もしかすると、選ぶ必要はまったくないのかもしれません。

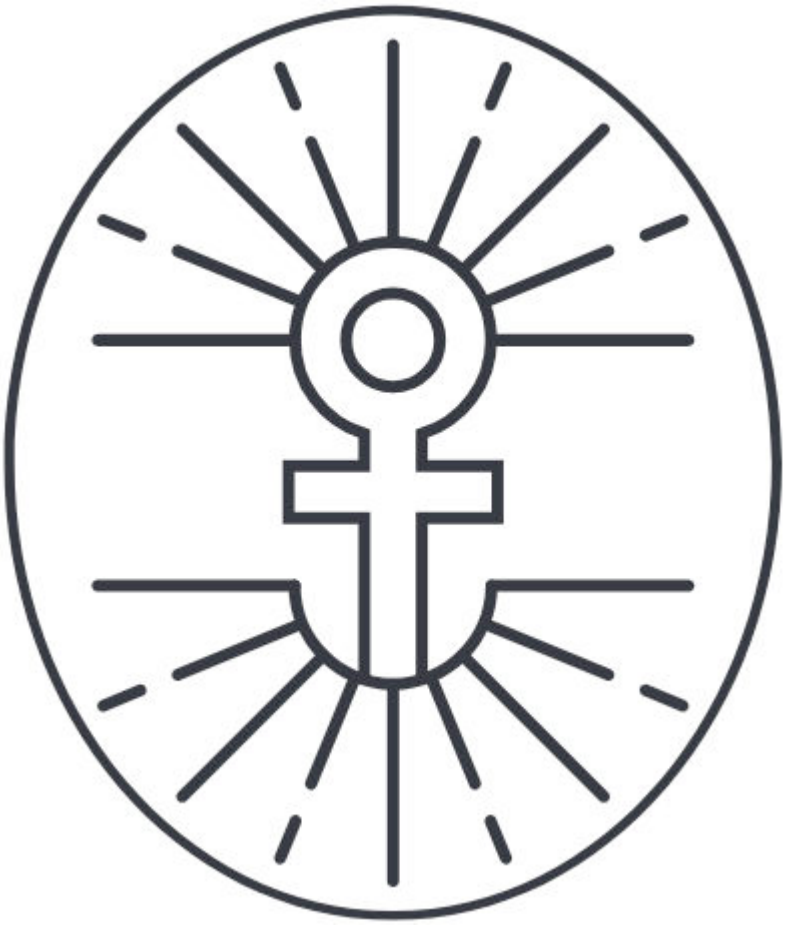
見解3（対等なパートナーに仕える者としての夫）は相互性に基づく結婚を支持しています。一方、見解4（贖われたpaterfamiliasとしての夫）はそのような結婚に異議を唱えるものではなく、なお強く家父長制の影響を受けている文化の中にある結婚と教会のための指針を提供しているのです。

言い換えれば、見解4は、最初の読者たちがおそらく理解したとおりにこの箇所を理解するうえで、最も助けになるかもしれません。しかし、特により平等な文化の中で生きている私たちにとっては、見解3こそがエペソ人への手紙5章を適用する正しい方法なのです。

ですから、夫婦に対する神の賢い助言とは、エデンの園での愛の関係に表れているような、自分たちの「一体」としての結びつきを認めることだと言えます。さらに夫婦は、互いへの全き献身と仕える姿勢によって、また――決断にあたっては――双方による検討と同意によって、この一体性を強めるべきです。この道を歩むうえで、二つのたとえが私たちを励ましてくれます。ご自分の教会に対するキリストの自己犠牲の愛と、一人ひとりが自分自身のからだに対して払う配慮です。

男女の真の平等という神の意図について、なお残る疑いにはどう向き合えばよいのでしょうか。次に、結婚において（また教会と社会においても）家父長制的な考え方を手放すべき、おそらく最も重要な理由を取り上げます。

9



合わせてくださる神

「[私たち夫は］かつては周囲の文化によって与えられていたものの、今日ではほとんど失ってしまった妻に対する権威に、しがみつこうとするのでしょうか。それとも、力とその要求を喜んで手放し、妻を対等な者として扱い、その代わりにより親密な夫婦関係を得るのでしょうか。」

ピーター・デイヴィッズ（Peter Davids）[56]

ゲイツ財団（Gates Foundation）は最近、大規模な国際調査に資金を提供しました。その調査によって、メディアにおいて女性が著しく過小に扱われていることが明らかになりました。「たとえば、2019年に分析された英国のオンラインニュースのうち、女性が引用されていたのはわずか29%でした。インドではさらに少なく、わずか14%でした。」[57] 社会における女性の地位の向上には、すばらしい進歩が数多くありました。それにもかかわらず、私たちは今もなお、男性に比べて女性を「見よう」とし、女性に「耳を傾けよう」とする姿勢がずっと乏しいのです。

まして、家父長制が揺るぎないものであったそれ以前の数千年の間、社会の状況は、女性が公の職務に就く力をどれほど妨げてきたことでしょうか。考古学者イアン・モリス（Ian Morris）は、古代アテネに女性がそもそも存在していたことを示す手がかりがなぜこれほど少ないのかを説明しています。「女性と奴隷は目に見えないままである」。それは、「あらゆるところに浸透した男性市民の文化」のためであり、その中で男性は「女性を抑圧しただけでなく、女性が暮らす空間を

も支配していた」のです。そのため女性は、当時の文化においても、また今日の考古学的な発見においても、事実上目に見えない存在になっているのです。[58]

初代教会が広がっていったより広いギリシア・ローマ世界でも、女性の状況はそれほど良くはありませんでした。いくつかのまれな例外を除けば、[59] 品位ある女性は公の指導的役割を目指しはしませんでした。彼女たちは家事と子育てに誉れを見いだしていました。ギリシアの演劇で最もよく登場する女性の役柄は女奴隷と娼婦でした。こうした劇は「生活の中の物語」を描いていたからです。町の尊敬される女性たちや未婚の若い娘たちは、家にとどまり、人前に姿を見せないことが期待されていました。ですから、「指導的役割」を担う女性がわずかしかいなかったのも不思議ではありません。結局のところ、公の生活で役割を果たし、自分に指導者としての資質があることを示すためには、ある程度の教育を受け、人々の前に出て行かなければならないのです。女性は人目につかないところで暮らしていたので、神から与えられた教える賜物や指導の賜物を持つ女性であっても、その賜物が認められ、伸ばされ、公の場で用いられる機会を得た人はほとんどいませんでした。[60]

新約聖書の中で、男性指導者の妻たちがこれほどまれにしか言及されないのはなぜでしょうか。キリスト者の夫婦の平等、パートナーシップ、そして共通の立場を重んじる現代的な考え方は、初期のキリスト教会にはほとんどありませんでした。当時は――教会の中でさえ――家事と子育ての務めは妻に割り当てられていたのです。

同じように、聖書の中に男性に比べて女性の登場人物がこれほど少ないのはなぜか、と問うこともできます。聖書の神的な霊感を否定する一部の批評家たちは今日、それはこの書物が家父長制の文化の産物にすぎないことの証拠だと主張しています。一部の補完主義者たちは、それは神の国において男性だけが果たすべき独特で卓越した役割を際立たせるための、神のなさり方なのだと言います。しかし、聖書の神的な権威と、聖書が扱っている数多くの歴史的状況の両方を理解するためのより良い道は、こう言うことです。神はご自分の啓示を、特定の状況にある人々に合わせて与えてくださったのであり、だからといってそれらの状況を自動的に理想化されたわけではない、と。この決定的な解釈原則を見落とすと、聖書の時代に女性がさまざまな形で男性に服従させられていたという観察から、女性は神の普遍的なご計画の一部として、あらゆる場所とあらゆる時代において男性に従うべきだという結論を、無批判に引き出してしまうのです。

神が合わせてくださること――その正しい理解

歴史の終わりに、神はついに理想的な社会を治められます。しかし堕落以来、神は、かつてのように大洪水で社会をただ裁くのではなく、壊れた社会の中で贖いのわざをなさることを選んでこられました。今のところ、神の贖いは次のような仕方で降り注いでいます。「聖霊の生ける水は［既存の］社会の地形の上を流れ、蛇行する川のように、出会う地形の輪郭に沿って流れていく。しかしその際、止めようのない水の流れのように地形を造り変え、ついには曲がった道をまっすぐにするのである。」[61]

新約聖書の著者たちが当時の文化の家父長制に同意しているように見える数少ない聖書箇所は、実際には、神が合わせてくださることの実例なのです。神は手元にあるものを用いて働かれ、使

徒たちはその模範に従います。彼らは、まだ石や雑草だらけの地に神の国の種を蒔くのです。今、私たちは二つの時代が重なり合う中に生きています。神の国は、堕落した社会制度に満ちた堕落した世界のただ中に、すでに来ています。いつの日か、神の国はこれらの制度に完全に取って代わります。しかし今のところ、神の国はそれらの制度の中に根を下ろし、そこから何か新しいものを生み出しているのです。

補完主義者のジョン・マッカーサー（John MacArthur）は、聖書を書いたのが男性だけであることは、神が男性だけを神のことばを教える者として定められた証拠だと主張しています。その際、彼は明らかに、ヘブル人への手紙をプリスキラが（アキラとともに）書いたという説を十分ありうるものと見ている神学者たちを無視しています。しかし何よりも、彼は、古代においては女性で書くための教育を受けた人はほとんどいなかったという事実を見落としています。聖書の諸書を書いたのが男性だけであった（あるいは、もしプリスキラが筆を執ったのであれば、少なくとも大部分が男性であった）という事実は、神が手に入るものを用いて働かれることの証拠なのです。たとえ神が、いつの日か、すべての男性と女性が読み書きのできるシャロームを造り出すと約束しておられるとしても、です。

妻の服従について、さらに

古代における女性の社会的状況は今日よりもはるかに悪いものでした（とはいえ、私たちもまだ長い道のりの途中にいますが）。男性は女性よりも優遇され、権力と公の職務を握っていました。人々は男性が言うこと、することには注意を払い、女性をごく小さな家庭の領域に閉じ込めました。そのため女性は、奴隷や子どもと同じように目に見えない存在だったのです。

抵抗した女性は、その代償を払わなければなりませんでした。たとえばエステル記1章では、クセルクセス王が王国のエリートたちのために宴会を催し、同時に王妃ワシュティも女性たちのための宴に友人たちを招きます。祝宴の最中、「ぶどう酒で心が陽気になった」クセルクセスは、美しい妻に、自分の宴を離れて「その美しさを民と首長たちに見せる」ように命じます。「彼女は容姿が美しかったからである。」ワシュティが来ることを拒むと、妻の不従順によって公の場で面目を失って怒った王は、知恵ある者たちに助言を求めます。彼らは、ワシュティを王妃の位から退け、二度と夫に会うことを禁じることに決めます。その理由はこうです。国中のほかの女性たちが彼女の例にならい、夫の命令に従わなくなる可能性を、すべて断ち切りたかったのです。その目的は、「すべての女たちが、身分の低い者から高い者に至るまで、自分の夫を敬うようになる」ことでした。

この物語は、ほとんどすべての古代文化において――この場合はイスラエルではなくペルシアにおいて――男性が公の職務で指導し、女性は夫に従属すべきだと考えられていたことを示しています。ですから聖書そのものが、家父長制は堕落の産物であって、イスラエルの神による特別な創造ではないことを示しているのです。

使徒たちが福音を宣べ伝え、ローマ帝国全土に教会を設立したとき、彼らも同じような男性支配の世界の中にいました。エペソ人への手紙5章についてはすでに調べましたが、この箇所以外でも、1世紀の教会のキリスト者の妻たちに対する使徒たちの助言は一致しています。パウロはコロ

サイの人々にこう書いています。「妻たちよ。……夫に従いなさい。」[62] またテトスにはこう書いています。「若い女たちに……夫に従うように……教えなさい。」[63] ペテロも同じことを言っています。「妻たちよ、自分の夫に従いなさい。……」[64] 聖書を権威として認める人にとって、これは一見まったく明白なことに思えます。私たちは、すべての結婚に対する神の理想は妻が夫に従うことだ、と考えるかもしれません。しかし、この章の後半で私はこの結論に反論します。この誤った思い込みは、これらの箇所の表面的で誤った読み方を前提としていることを示すことによってです。

コロサイ人への手紙のパウロの言葉、「妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。夫たちよ。妻を愛しなさい。妻に対して辛く当たってはいけません」を、私たちはどう理解すればよいのでしょうか。私は、これらの節の解釈から導かれる結論は、エペソ人への手紙5章の場合と何ら変わらないと主張します。コロサイ人への手紙とエペソ人への手紙が同じ時期に書かれたことについては、研究者の意見は一致しています。そのことは、両方の手紙に出てくる重要な言い回しに見られる、一種の「カット・アンド・ペースト」の手法からも分かります。それに先立つ節は、両方の箇所でほぼ同じです。そこでは次の言葉が同じ順序で用いられています。「互いに」「詩」「賛美」「霊の歌」「心の中で」「いつでも……父なる神に感謝しなさい」「御名によって」「主」「イエス」「キリスト」。違いは、わずか2節のコロサイ人への手紙の箇所が、13節にわたるエペソ人への手紙の箇所の短縮版だという点です。エペソ人への手紙5章は、コロサイ人への手紙の簡潔な言い回しを広げて述べており、それによってその意味を明らかにしているのです。

では、ほかの二つの箇所、テトスへの手紙2章3-5節とペテロの手紙第一3章1節はどうでしょうか。これらの箇所でパウロとペテロが、人類の全歴史にわたるすべての女性に対して、夫に従えという一般的な命令を課していると考えることには、疑問を抱くだけの十分な理由があります。[65] これは、アリストテレスの家庭規範に従って暮らしていた1世紀の地中海世界の人々への牧会的な助言であり、そのようなものとして、創造の秩序によって動機づけられているのではなく、良い評判を守りたいという理解できる関心によって動機づけられているのです。説明しましょう。

家庭訓

「妻たちよ、従いなさい」という節を文脈から切り離すと、それを証拠聖句として使ってしまう危険があります。文学的な文脈、つまりこれらの節やそれに類する節が見られる、より大きな箇所を見てみましょう。

	妻―夫 / 女性―男性	子ども ― 親	奴隷 ― 主人
エペソ	5:21-33	6:1-4	6:5-9
コロサイ	3:18-19	3:20-21	3:22-4:1
ペテロ第一	3:1-7	言及なし	2:18-25
テトス	2:1-8	言及なし	2:9-10
テモテ第一	5:1-16	言及なし	6:1-3

文学的な文脈を分析すると、何が見えてくるでしょうか。まず第一に、妻の服従が言及されるときはいつでも、それはいわゆる「家庭訓」の一部であり、そこでは夫、妻、子ども、奴隷から成る家庭の中の関係が規定されています。アリストテレスのそれ以前の教えに従い、ローマ法のもとでは、家庭は年長の男性の支配のもとに秩序づけられるべきものとされていました。成人男性がいない場合には、最年長の女性がその役割を引き受けました。古代の家庭訓は、上から順に定められた序列に従っていました。家長、次に妻、次に子どもと奴隷です。言い換えれば、パウロとペテロは、キリスト教の歴史の残りの期間を通してすべての夫婦に当てはまるような、文脈から独立した知恵を告げているのではありません。彼らはまったく特定の文脈に語りかけているのです。すなわち、ローマ社会の決まりに従って秩序づけられた、古代のごく普通の家庭において福音を生きるという文脈です。

第二に、これらの箇所のどれ一つとして、夫に指導せよと命じてはいません。妻に従うよう求めているだけです。使徒たちは、男性による指導がすでに行われていることを前提としていました。彼らが自分たちの命令によって目指したのは、夫の支配を和らげ、妻の低い地位を引き上げることでした。ペテロとパウロは女性たちに、夫の支配をただ我慢するのではなく、服従を、福音によって強められた自発的なものとして受け止めるよう教えているのです。

第三に――そしてこれがこの章の議論にとって最も重要な点ですが――これらすべての箇所で、夫に対する妻の服従を求める命令は、主人に対する奴隷の服従を求める命令と並べて置かれています。二つの箇所では、この並行関係が親に対する子どもの従順にも適用されていますが、主人と奴隷の関係との並行関係は、毎回必ず示されています。

奴隷制と家父長制の間のこの並行関係については、すぐあとでもう一度取り上げます。しかしまず指摘しておきたいのは、パウロとペテロは、奴隷制も結婚における妻の服従も、理想として掲げてはいないということです。むしろ彼らは、すべての良い霊的指導者がそうすべきであるように、自分たちが関わっている教会を助けて、時には理想からほど遠い状況の中で、最善を尽くせるようにしているのです。神も創世記16章で似たようなことをなさっています。女奴隷ハガルが、自分を虐げた女主人サラのもとから逃げ出したときのことです。ハガルを救い、力づけたあと、神はこう言われます。「あなたの女主人のもとに帰りなさい。そして、彼女のもとで身を低くしなさい。」[66] 私たちのうち誰が、そこから、神のこの指示は彼女に対する神の最高かつ最善のご計画の表れであった、と結論づけるでしょうか。いいえ、神の父親のような助言は、理想からほど遠い状況の中で彼女が最善を尽くせるように助けているのです。明らかに、荒野に逃げるよりも、サラに従うほうが彼女とその子どもにとって良かったのです。

今日でも、自分が置かれている理想的でない状況の中で最善を尽くすほうが良い場合があります。たとえば、結婚したばかりの私の父は、南アフリカ軍での2年間の兵役に召集されました。家には生まれたばかりの子どもと若い妻がいたので、それが理想からほど遠いことは分かっていましたが、彼には選択の余地がありませんでした。悪い状況の中で最善を尽くすことしかできなかったのです。ほかの選択肢は刑務所でした。時には、牧師が自分の教会の人々に、民主的な選挙に参加するよう勧めることがあります。民主主義は聖書に書かれておらず、したがって必ずしも人間社会に対する神の永遠の理想ではないにもかかわらずです。それに反対する説教をすれば、無用な

反発を招くでしょう。1世紀におけるアリストテレスの家庭規範についても同じことが言えます。[67]

良い評判への配慮

理想的でない状況の中で最善を尽くせるよう助けるということのほかに、ペテロとパウロはなぜ、女性たちと奴隷たちに、それぞれ夫と主人に自発的に従うよう勧めているのでしょうか。そして夫と主人の側も、それぞれ妻と奴隷に親切に、敬意をもって接するよう指示されているのです。ほとんどの箇所に、説得力のある答えが見つかります。パウロとペテロは、見つめている世の人々の目に映る若い教会の信頼性と伝道的な魅力を守ることに心を砕いているのです。その世界では、女性と奴隷がpaterfamiliasに従うことは、まさにローマ法そのものでした。

そのことを示す証拠が、テキストの中に次のようにあります。

- ペテロは奴隷と妻たちに語りかける直前に、皇帝に従うよう勧め、こう付け加えています。「善を行って、愚かな人々の無知な発言を封じることは、神のみこころだからです。」[68]
- ペテロは妻たちにこう言っています。「夫に従いなさい。たとえ、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって神のものとされるためです。」[69]
- パウロはクレタの女性たちにこう言っています。「夫に従いなさい。それは、神のことばが悪く言われることのないためです。」[70]
- パウロはクレタの奴隷たちにこう言っています。「主人に従いなさい。それは、あらゆる点で私たちの救い主である神の教えを飾るようになるためです。」[71]
- パウロはエペソの奴隷たちにこう言っています。「くびきの下にある奴隷はみな、自分の主人をあらゆる点で尊敬に値する人だと思わなければなりません。神の御名と教えが悪く言われないようにするためです。」[72]
- テモテを通してエペソの教会に伝えるすべての指示について、パウロはこう書いています。「人々が非難されることのないように、これらのことを命じなさい。……反対者にそしる機会を一切与えないように。」[73]

ここで何が起こっているのでしょうか。とりわけペテロの手紙第一、そしてテトスへの手紙とテモテへの手紙第一も、苦難の中で戦っている、しばしば迫害されていた小さな教会に宛てた手紙です。サタンは、これらの教会に否定的な注目を集めさせるという戦略をとっています。エペソ人への手紙は、外部の人々を考慮せずにキリスト者だけに宛てられた「内部向け」の文書です（ですから評判の問題には触れていません）。それに対してこれら三つの手紙では、ある状況に特有の問題、すなわち教会が外部の人々にどう映るかという問題を扱うことが動機になっているのです。シンシア・ウェストフォール（Cynthia Westfall）はこう述べています。

それは名誉を重んじる文化であり、その中で性別に基づく役割は重要な意味を持っていました。妻が夫を支配することによって夫の「主人」のようにふるまうなら、それはローマ帝国の階層秩序全体と保護者制度（パトロネジ）に対する破壊的な挑戦と見なされました。そのような慣習への違反は重く受け止められ、教会の評判を損なうこともありえました。女性たちのふるまいは、初代教会やほかの宗教団体に対する論争的な攻撃にとって、格好の口実となったのです。[74]

奴隷と妻が法律によってpaterfamiliasに従うよう義務づけられていた世界の中で、これらの妻と奴隷たちは、通常の程度を超えて、自らの人生をそれぞれ夫と主人に自発的に従わせるよう招かれていました。幸いなことに、使徒たちはpaterfamiliasに対しても、彼がキリスト者であれば、家の者たちを心から世話するようにと、それにふさわしい指示を与えていました。

要点をまとめましょう。ペテロとパウロが女性たちに夫に従うよう告げたとき、彼らはそれによって、あらゆる結婚における性の階層秩序を一種のキリスト教的理想として定めたのではありません。むしろ彼らは、理想的でない状況に合わせていたのです。ペテロは手紙の最初の行で、将来の完成された社会に生きる信者たちにではなく、「各地に散って寄留している人たち」に語りかけています。私たちは、神の国における真の国籍を生きつつも、できる限り周囲に適応しようとしている寄留者なのです。古代の家庭規範を考慮に入れるなら、これらの箇所は、教会が文化的な規範に公然と反抗することなく、それを乗り越えていくよう促されているものとして理解すべきです。ペテロとパウロは不完全な秩序の中で行動しなければなりませんでした。ローマの役人たちは、キリスト者を投獄するためのあらゆる口実を探していたからです。どんな挑戦も、これらの小さな教会に取り調べと迫害をもたらしたことでしょう。注目すべきことに、ペテロの手紙第一、テトスへの手紙、テモテへの手紙第一が書かれてからわずか数年後に、その著者であるペテロとパウロは、ローマの秩序を乱したかどで処刑されたのです。

「奴隷たちよ、従いなさい……同じように、妻たちよ、従いなさい」

テトスは、女性たちに夫に従うよう教えなさいと命じられ（2:3-5）、そのすぐあとで、奴隷は主人に従うべきだとも言われています（2:9）。

ペテロはパウロの順序を逆にしています。まず奴隷と主人の関係について語り、次に妻と夫の関係について語っています。ペテロの手紙第一2章18節では、奴隷たちは、善良で優しい主人だけでなく、不正な主人にも、心からの敬意をもって従うよう求められています。そして3章1節では、妻たちも同じように夫に従うべきだと記されています。ペテロは言葉の選び方によって、これらの指示の結びつきを強めています。「奴隷たちよ……従いなさい……同じように、妻たちよ……従いなさい……！」

では、この章の中心的な議論に進みましょう。妻は従うべきだという指示を、補完主義者たちは時代を超えた普遍的なものとして解釈します。ところが、奴隷は従うべきだという並行する指示については、奴隷制を過去のものとした私たち現代人は、状況に応じたものとして理解しているのです。

誰も歴史から学ばなければ歴史は繰り返すので、この洞察についてもう少し詳しく説明しましょう。

奴隷制廃止に対するキリスト者の抵抗

神の正義への意識に突き動かされたキリスト者の奴隷制廃止論者たちは、まず1833年に英国で制度としての奴隷制を克服し、その後、時とともに奴隷解放はほかの国々にも広がっていきました。ウィリアム・ウィルバーフォース（William Wilberforce）、ジョン・ウェスレー（John

Wesley)、ジョン・ニュートン（John Newton)、チャールズ・フィニー（Charles Finney)、グリムケ姉妹（Grimké)、ハリエット・ストウ（Harriet Stowe)、オラウダ・イクイアーノ（Olaudah Equiano)、フレデリック・ダグラス（Frederick Douglass）といった人々が、ついに奴隷制という制度に輝かしく永続的な終止符を打ったのです。現代のキリスト者はみな、こうした社会変革の英雄たちについて喜んで語ります。

あまり知られていないのは――そしておそらく、今日のキリスト者にとって恥ずべきことなので、私たちは意図的に忘れているのかもしれませんが――、米国で奴隷制廃止に最も強く反対したのが、南部のキリスト者たちだったということです。実際、今日米国で最大の教派である南部バプテスト連盟は、1845年にまさにこの問題をめぐって北部バプテストから分裂したのです。

18世紀に至るまで、ほとんどのキリスト者は奴隷制が聖書的なものだと信じていました。つまり、それが神に認められたものだという意味です。ロバート・ダブニー（Robert Dabney）やJ・H・ソーンウェル（J. H. Thornwell）といったアメリカの聖書に忠実な神学者たちは、奴隷制を維持するための説得力のある聖書的議論を展開しました。当時最大の改革派神学者であったチャールズ・ホッジ（Charles Hodge）は、The Bible Argument on Slavery［奴隷制についての聖書的議論］と題する論文を書き、その中で次のように論じました。[75]

- 神が奴隷制を制定された。ノアの息子ハムに奴隷となる宣告を下すことによって、[76] 神ご自身が奴隷制を制定された。
- 神は奴隷制を良しとされた。アブラハム、ダビデ、ヨブでさえ奴隷を持っていた。
- モーセの律法は奴隷制を支持していた。たとえば十戒の第四戒と第十戒は、神の民が奴隷を所有していることを前提としている。さらにモーセの律法は、貧しいユダヤ人や戦争捕虜を奴隷にすることを許していた。[77]
- イエスは一度も奴隷制に反対する発言をされなかった。イエスが非難されなかったものは、きっと容認されていたに違いない。
- 使徒たちは奴隷に、主人に従うよう命じた。彼らは奴隷制を非難することなく、それを規定した。
- 使徒たちは、福音の積極的な一面を説明するために奴隷制を用いた――「キリストの奴隷」である私たちは、自分が属している主に完全に従うべきである。

ごく少数の神学者たちが、この多数派の神学者たちの考えを変えようと試みましたが、失敗に終わりました。たとえば1845年に行われた4日間にわたる討論で、奴隷制廃止論者のジョナサン・ブランチャード（Jonathan Blanchard）は、「聖書の一般的な原則」と「聖書全体の広がり」を検討しました。彼にとって、「聖書の原則は正義と義である」ことは明らかでした。彼は、聖書の引用を使えばほとんど何でも裏づけることができ、そのようにして聖書のより上位にある真理に反する結論に至ることもありうる、という見解を述べました。

残念なことに、南部の聖書を信じるキリスト者たちは、神が奴隷制を良しとしておられると固く信じていたため、奴隷制を維持する自分たちの権利を守るために、50万人を超える命が失われた南北戦争で武器を取ることさえいといませんでした。南北戦争によってアメリカ南部の人種差別

が終わったわけではありませんが、かつて奴隷を所有していたキリスト者たちはこの戦争によって深く打ちのめされ、ついには奴隷制が間違っていたことを認めざるを得なくなりました。正義感に突き動かされた止めようのない文化の変化によって、彼らはもう一度聖書に向き合うようになり、そこでゆっくりと、しかし確実に、自分たちの行いの誤りに気づいていったのです。今日では、かつて数多くの「聖書的」議論があったにもかかわらず、聖書を正しく理解するなら奴隷制を支持してはおらず、その慣行は罪深いものだと、事実上すべての神学者が信じています。

奴隷制と家父長制の比較

では、奴隷制と家父長制、すなわち男性が指導すべきだという、文明の中で昔から当たり前とされてきた前提との並行関係を調べてみましょう。聖書を補完主義的に解釈すると、似たような論法がいかにたやすく組み立てられるかを見てみましょう。[78]

- 神が男性の権威を制定された。堕落以前のエデンの園で、神はアダムをエバのかしらとされた。
- 神は男性の権威を良しとされた。神の民を導いたのは、女族長たちではなく族長たちであった。イスラエルの歴史を支配しているのは、女王たちではなく王たちである。
- モーセの律法は男性の権威を支持していた。第十戒は、隣人の妻やろば、そのほかの所有物を欲しがってはならないと述べている。また祭司は女性ではなく男性でなければならない。
- イエスは一度も夫の権威に反対する発言をされなかった。イエスが非難されなかったものは、きっと容認されていたに違いない。
- 使徒たちは妻たちに、夫に従うよう命じた。彼らは家父長制を非難することなく、それを規定した。
- 使徒たちは、福音の積極的な一面を表すために夫の権威を用いた。そこでは、夫は主キリストを表すべきものとされ、妻はキリストご自身に従うように夫に従わなければならなかった。

奴隷制と家父長制を聖書によって正当化しようとする試みの間にある、この目立った、そして身の引き締まるような並行関係がお分かりになるでしょうか。世界最大の教会でさえ、今では「妻たちよ、夫に従いなさい」と「奴隷たちよ、主人に従いなさい」という二つのテキストの並行関係を認めています。1988年、教皇ヨハネ・パウロ2世（Johannes Paul II.）は、エペソ人への手紙6章のパウロの言葉を奴隷制の正当化に用いることは、エペソ人への手紙5章を結婚における妻の服従の正当化に用いることと何ら変わらない、という見解をはっきりと表明しました。[79]

リンゴとナシ？

補完主義の神学者たちは、この類似性にどう応じているのでしょうか。ジョージ・ナイト（George Knight）は、「妻たちよ、従いなさい」と「奴隷たちよ、従いなさい」という二つのテキストはまったく別物であり、「リンゴとナシ」のように比べられないものだと言います。なぜでしょうか。ここで、補完主義の代表的な神学者サム・ストームズ（Sam Storms）の記事[80]を引用します。彼は、私たちが奴隷制を非難しながら、同時に妻の服従を支持できると彼が考える六つの理由を挙げています。一つずつ彼の言葉を引用し、それを斜体にして引用符で囲み、それぞれの議論に答えていきます。

第一に、「聖書は、望ましくない関係を、永続的な理想として認めることなく規定することで知られている（マタイ19:8、コリント第一6:1-8を参照）。パウロは奴隷と主人の関係についての指示によって、奴隷制が良い制度だと言っているのではない。」

つまりストームズは、神が社会構造に合わせてくださる用意があることを十分に理解しているのです。結構なことです。しかしそれこそが、ギリシア・ローマ世界において文化的に定められていた、paterfamiliasに対する妻の服従についても当てはめられるべき議論なのです。聖書はそれを規定してはいても、それを良しとしてはいないのです。

第二に、「奴隷制という制度は創造に根ざしているのではなく、むしろ堕落から生じたゆがみである。それに対して、結婚と男性の優位は、堕落以前に存在していた本来の創造の秩序の一部である。」

ここでストームズは創世記2章と3章を誤解しています。そして、創世記3章16節によれば創造ではなく堕落の直接の結果であるものを、理想にまで高めているのです。

第三に、「いくつかの箇所で、奴隷制廃止の種が蒔かれている。ピレモンへの手紙16節、エペソ人への手紙6章9節を参照。しかし、新約聖書の中には、夫と妻の関係についても同じことが意図されていたことを示すものは何もない。」

それは事実ではありません。ガラテヤ人への手紙3章28節、コリント人への手紙第一7章、そしてエペソ人への手紙5章の正しい解釈、とりわけ互いに従うことについてのその教えは、結婚における男性支配の「解消のための種」にほかなりません。

第四に、「もし奴隷制の議論が、夫に対する妻の服従を無効にするために用いられるなら、それは親に対する子どもの服従をも無効にすることにならないだろうか。パウロがエペソ人への手紙5-6章で、夫と妻、親と子ども、奴隷と主人の関係をどのように扱っているかに注意してほしい。」

ストームズは間違った言葉を使っています。子どもは「従順である」べきであり、妻と奴隷は「従う」べきなのです。このことは、妻と奴隷を独特な仕方で結びつけています。ストームズはまた、当時の文化の親と子どもが、親と子についての節を、今日の西洋の私たちと同じように読んだと考えているようです。しかし、私たちのうち誰が、子どもは成人してからもずっと親に従順であるべきだと言い張るでしょうか。エペソ人への手紙6章は、1世紀の読者には、パウロが成人した子どもに対してさえ、親を敬うだけでなく親に従順であるよう命じているものとして理解されたことでしょう。[81]

しかし、たとえ当時の親子関係が今日と同じであったとしても（実際にはそうではありませんでしたが）、結婚における性別に基づく階層は、親子関係における世代に基づく階層とは大きく異なります。幼い子どもは人生や生きる知恵についてほとんど知らないので、依存と従順が彼らにとって最善である立場に置かれており、そのため平等主義の文化においてさえそれが守られています。教育を受けた二人の大人の間の結婚には、同じことは当てはまりません。子育ての目的は、子どもを依存と従順の段階から先へと導き、やがて自分自身の家庭のかしらとして立つことができるようにし、それによって私たちと対等な者とすることです（パウロがエペソ人への手紙5章31節でほのめかしているとおりです）。ですから、子どもの全生涯にわたって親の指導権を主張しよ

うとするのは間違いでしょう。それならば、なぜ私たちは、配偶者に対してそうすることが正しいとこれほど確信できるのでしょうか。

第五に、「パウロの奴隷への指示の中には、奴隷制に関する永続的な道徳的命令や絶対的な道徳原則は何も述べられていない。」

ここでストームズは第一の点を繰り返しています。しかし、ペテロの手紙第一2-3章の言葉を見てください。「奴隷たちよ、……主人に従いなさい。……同じように、妻たちよ、自分の夫に従いなさい。」いったい何を根拠に、ストームズは、前者は永続的な道徳的命令ではなく、後者はそうだと確信しているのでしょうか。彼の見方は一貫していません。

第六に、「パウロは、奴隷が自由を得る可能性をはっきりと想定し、それを勧めている（コリント第一7:21）。妻と夫への服従については、彼はそれに匹敵することを何も言っていない。」

それは、奴隷制とは違って、結婚は神のご計画によれば「一体」の結びつきだからです。[82] 奴隷制からの解放が望ましかったのは、それが神の定められた労働という制度の贖いを表しているからでした。同じように、家父長制からの解放は、神の定められた結婚という制度の贖いなのです。パウロがエペソ人への手紙5章を書いた目的は、アリストテレスの規範に対する革命のメッセージを送ることなく、その文化の中でできる限り対等な結婚を実現することにあります。

これらすべてが意味するのは、ジョージ・ナイトとサム・ストームズの主張に反して、奴隷制と家父長制は互いに非常によく似ているということです。決してリンゴとナシのように比べられないものではなく、同じ堕落した木になった腐った実なのです。奴隷制は、原理的には、妻に対する夫の指導権という考えに非常によく似ています。その現れ方が温情的であれ残忍であれ、どちらの慣行も堕落した世界の産物です。一方で、今日すべてのキリスト者がしているように「温情的な」奴隷制さえ非難しながら、他方で「温情的な」家父長制の砦であり続けるのは、筋が通りません。

福音が社会に及ぼす長期的な影響の一つが奴隷制を取り除くことであるなら、福音は同じ一撃で家父長制をも打ち倒すのです。そのため、クラリス・マーティン（Clarice Martin）は、アフリカ系アメリカ人の間での聖書解釈についての注目すべき論文の中で、示唆に富む問いを投げかけています。「黒人の男性説教者や神学者たちが、奴隷について説教したり書いたりするときには自由な解釈学を用い、女性のことになると字義どおりの解釈学を用いるのは、いったいどうしてなのか。」[83]

過去の不正からの教訓

奴隷制と家父長制の類似性を否定することによって、補完主義の神学者たちは、アメリカ南部のキリスト者の反奴隷制廃止論者たちの過ちを繰り返しています。そして、自分たちの神学的な洞察力を信頼している教会を、イエスの教会にとって再び恥ずかしい立場に立たせ、それによって教会自身の一部の会員を低く扱うことを長引かせているのです。

これらすべてをさらに悲劇的なものにしているのは、全世界で最も影響力のある男性支配の擁護者が、アメリカの教会の4つに1つが属している信仰共同体である南部バプテストだという事実で

す。彼らは、その代表的な神学者たちやメディアを通して、自分たちの考えを今も世界中に広め続けています。ゲオルク・ヘーゲル（Georg Hegel）の警告が現実のものとなっているように思われます。「私たちが歴史から学ぶ唯一のことは、私たちが歴史から何も学ばないということである。」

では、今日の教会は、キリスト者の反奴隷制廃止論者たちの過ちから、具体的に何を学ぶべきでしょうか。第一に、聖書全体からのテキストを含む大部の「学術的」著作を通して、ある確信に到達することは可能です——教派全体や神学の学派全体がそうであったように。それでもなお、誤っていることがありうるのです。

第二に、文化が良い方向へと発展することはありえます。そしてそれは実際には、数千年にわたってその文化の中に根を下ろしてきたキリスト教の原則の結果なのです。たとえば、ガラテヤ人への手紙3章28節のパウロの「人類のためのマグナ・カルタ」は、平等と社会的階層の終わりという考えを、これほど力強く言い表した歴史上最初のものです。奴隷制と社会における男性支配の廃止について、私たちは実際どれほどこの節に負っているでしょうか。社会における福音の影響をはねつけたり、ましてや攻撃したりするのではなく、教会はそれを自分たちのものとして受け止め、喜び祝うべきなのです。

第三に、社会における発見や進歩が、長く受け継がれてきた聖書の解釈に疑問を投げかけることはありえます。ほとんどの人が、世界は平らだとか、地球は宇宙の中心だとか信じていた時代には、教会はそれを裏づける聖書の節を持っていました。科学的な発見がそれを覆したとき、それは私たちに、聖書を新しい仕方で読み、ずっとそこに書かれていたことを見る機会を与えてくれました。産業革命と、のちの女性の権利運動の最初の波が西洋を覆ったとき、女性たちは初めて、男性に匹敵する知性と能力を示す機会を得ました。これを脅威と見るのではなく、むしろ私たちにとって、こう問いながら聖書そのものを新たに見直す機会なのです。私たちはこれまでずっと、何を見落としてきたのだろうか、と。

第四に、よくある解釈の誤りを避けなければなりません。聖書の個々の部分を解釈するには、聖書全体を参照しなければなりません。「証拠聖句」を寄せ集めることはあまりにもたやすく、しかもそれ自体が誤って解釈されてしまいます。聖書の諸書は、私たちのために書かれたものではあっても、私たちに宛てて書かれたものではないことを忘れてはなりません。私たちは、テキストが書かれた歴史的文脈を学び取らなければなりません。それは、私たちの時代と文脈に適用できる時代を超えたメッセージを導き出す前になすべきことです。

第五に、自己利益と集団思考は、私たちに聖書を非常に偏った仕方で読ませることがあります。（このテーマについてさらに詳しくは、付録6をご覧ください。）一般に、人は（キリスト者も）自分の地位や特権を脅かすものすべてに抵抗します。奴隷を所有していた神学者たちが、19世紀の神学論争において最も大きな声を持つことが許されてよかったのでしょうか。補完主義の教会や奉仕団体や大学で、牧師、指導者、教授としての職と評判を失うことになる人々が、今日この問題について支配的な声であってよいのでしょうか。

第六に、聖書を解釈するには教会全体が必要です。私たちとは違う見方をしている教会の一部を無視したり、見下したりするのは、決して賢明なことではありません。聖書を心から愛している人々を「文化に迎合している」とか「リベラル」だとか呼ぶことは、神の声に対して耳をふさぐ

ことの一つの形になりかねません。私たちが聖書を「低く見ている」と非難する人々のほうが、聖書のある部分については私たちよりはるかによく理解しているかもしれないのです。

最後に、社会のほかの部分がすでに捨て去った誤った社会慣行にしがみつくことは、社会における教会の信頼性にとって、とりわけ役に立ちません。私の考えでは、教会が家父長制の砦であり続けることは、奴隷制を正当化するために聖書を使い続けるのと同じくらい自滅的です。文化と教会が、奴隷制は受け入れられるものだという点で多かれ少なかれ一致しており、教会がその最も穏やかな形をほめたたえさえしていた何世紀もの間は、それに同調しても教会の評判がそれほど損なわれることはありませんでした。しかし想像してみてください。西洋の現代のキリスト者の家庭が、聖書的な理由からその慣行に同意した二人の奴隷を抱えることによって「神に従う」ことを選んだとしたら、それはどう受け止められるでしょうか。

同じように、教会がジャン＝ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau）の言い表した文化的な確信――「男は強く能動的であるべきであり、女は弱く受動的であるべきである。一方は力と意志の両方を持たなければならず、他方はほとんど抵抗しなければそれで十分である」[84]――と一致していた間は、家父長制に同調しても教会の評判にとってそれほど有害ではありませんでした。しかし、The Handmaid's Tale のような受賞歴のあるテレビドラマでさえ、妻の服従の「恐ろしさ」を土台にしている今、もし私たちが娘たちに夫の一方的な権威に服するよう教え、教える力と指導する力を持つ女性たちに教えることや指導することを禁じるなら、私たちは教会として、あの架空の、奴隷を抱える現代の家庭からそれほど遠くないところにいるのです。[85]

もし私たちキリスト者が、女性の平等を家庭の枠を越えて教会と社会にまで広げるなら、私たちの結婚をより調和のとれたものにするだけでなく、私たちの文化の中で私たちの福音の信頼性を強めることにもなるでしょう。私たちの同胞市民が忘れてしまっていること――しかし私たちが思い起こさせることのできること――は、私たちの文化における今日の女性の地位の向上が、歴史的には、尊厳を与える私たち自身の福音がゆっくりと及ぼしてきた影響と、神の愛に満ちた正しいご性質を知ることに根ざしている、ということです。結局のところ、神ははるか昔から補完主義的な制限など知らず、女性たちにその賜物を存分に発揮する力を与えてこられたのです――男性を力強く導き、教える可能性も含めて。

注

1. リチャード・ヘイズ（Richard Hays）、First Corinthians、116頁。
2. たとえ結婚において権威と服従が当てはまるとしても、それは妻が別の領域で夫に対して権威を持つことができないという意味ではありません。たとえばラピドテの妻デボラは、彼女が生きていた家父長制の文化の中で、家では夫から指示を受けていたかもしれませんが、それでも彼女は自分の国で成功した指導者でした。そこでは夫でさえ彼女から指示を受けなければなりませんでした。これは複雑に思えるかもしれませんが、矛盾してはいません。なぜなら聖書には、結婚における妻の服従が、彼女が教会と社会で指導的役割を担ってはならない理由として挙げられている箇所はどこにもないからです。
3. ささやかな例として、私は一点補完主義の意味での見解を、西ヨーロッパの N・T・ライト（N. T. Wright）、東ヨーロッパのハイク・ホヴァニシャン（Hayk Hovhannisyan）、そしてかつてはオーストラリアのマイケル・バード（Michael Bird）にも見いだしました。アメリカにおける平等主義と補完主義の「戦争」に深く巻き込まれている人々には、この可能性は見えないかもしれません。N・T・ライトはこう説明しています。「問題の一部は、特にアメリカ合衆国において、文化があまりにも二極化しているため、多くの人が一つのボックスにチェックを入れると、同じ側の他の十数個のボックスにもチェックを入れなければならないと思い込ん

でしまうことにある――その側そのものがきわめて恣意的で文化に縛られたものであることに気づかずに。」何かを十分に何度も聞かされると、私たちはそれを信じたくなります。私が夜空の二つの星を指して、「この二つの星はつながっています。『ポインターズ（指極星）』という星座を形作っているのです」と言えば、聞き手はそれらの星を結ぶ目に見えない糸を思い描きます。空を見上げるたびに、その人はそれらの「結びつき」に気づくでしょう。実際には、それらは互いに何百万光年も離れた別々の星です。私たちの銀河の中のある特定の視点から見たときにだけ、それらは互いに近くにあるように見えるのです。夫のかしらとしての立場と長老職についても、まったく同じことが言えます――それらは別々の星なのです。神の意図においてそれらは必ずしも結びついてはおらず、聖書においても確かに結びついてはいません。

4. ベス・アリソン・バー（Beth Allison Barr）が The Making of Biblical Womanhood（第6章）で Happily Ever After を引用しています。
5. ところが、著名な補完主義の神学者たちは、誤ってまさにそのことを主張しているのです！ たとえばアンドレアス・ケステンベルガー（Andreas Köstenberger）は God, Marriage, and Family（250頁）でこう書いています。「イエスは創世記1章27節と2章24節の両方を引用することによって（マタイ19:4-6と並行箇所）、結婚についての創造主なる神の本来の計画を再確認された。こうして私たちの主は、夫をかしらとし、妻を従い支えるパートナーとする、結婚についての神の本来の設計を、断固として力強く確認されたのである。」
6. ウェイン・グルーデム（Wayne Grudem）、Evangelical Feminism、第1章。
7. ジョン・パイパー（John Piper）、Recovering Biblical Manhood and Womanhood、第1章。
8. Ed と Gaye Wheat、Intended for Pleasure、第4版、30–31頁。
9. Kevin Leman、Sheet Music、54頁。
10. Tim と Kathy Keller、The Meaning of Marriage、第2章。
11. Tim と Kathy Keller、The Meaning of Marriage, 第6章。
12. Tim と Kathy Keller、The Meaning of Marriage、付録。
13. Timothy Keller、The Timothy Keller Sermon Archive、2012–2013年。
14. 音声はこちら：www.bit.ly/2ZPRZGH
15. ジョン・パイパーはこの議論を次のように述べています。「教会における男性と女性の関係において、男性は、夫が家庭で指導するのと同じように、指導を担うべきである（エペソ5:22-33）。」興味深いことに、私の大陸で最大級の教会の一つは、女性が説教することも教会を指導することも認めています。しかし、妻の服従を強調しているために、そこでは奇妙な文化が生まれてしまいました。女性の説教者や牧師たちが結婚を拒むのです。結婚した瞬間に、教会員たちが彼女たちの指導的役割をそれほど真剣に受け止めなくなるからです。
16. 音声はこちら：www.bit.ly/2ZPRZGH
17. 創世記3:16
18. エレイン・ストーキー（Elaine Storkey）、Scars across humanity: Understanding and Overcoming Violence Against Women、210頁。
19. 考え方は教会の境界を越えて広がります。ですから私たちは、キリスト教の考え方が文化全般にどのような影響を及ぼすのかという問いにも向き合わなければなりません。教会が、夫への妻の服従こそ神の理想であると教えるなら、それはジェンダーに基づく暴力を防ぐことには役立ちません。それに対して、教会が、結婚についての神の理想は相互性に基づいていると強調するなら、それはドメスティック・バイオレンスを抑えることに確かに役立つでしょう。
20. www.ab.co/3bHZF05 および www.bit.ly/3GNbrVt を参照。
21. www.bit.ly/3nVy1CK
22. エガリッチ（Eggerichs）、Love & Respect、221頁。彼はこの主張を、研究やその他の外部の証拠に依拠することなく行いました。
23. シーラ・グレゴワール（Sheila Gregoire）、The Great Sex Rescue、第2章。ゴットマン研究所の研究も同じ結果に達しています。ジョン・ゴットマン（John Gottman）は著書『Die sieben Prinzipien für eine glückliche Ehe』の中で、「統計的に見て、夫がパートナーと力を分かち合う用意がない場合、結婚が破綻する確率は81％である」と書いています。
24. シーラ・グレゴワール、The Great Sex Rescue、第2章。
25. シーラ・グレゴワール、The Great Sex Rescue, 第2章。
26. あるポッドキャストのインタビューで、アラン・フロウは「決定票」モデル [tiebreaking] を擁護し、その理由として、牧師として平等主義の結婚のカウンセリングをしていると、「だれが決定を下すのかわからないた

めに、多くの緊張がある」ことに気づくからだと述べています。こちらで聞くことができます：www.bit.ly/2ZPRZGH。しかし、それは本当に一般的に当てはまるのでしょうか。私自身の結婚の経験と、私がカウンセリングしてきた夫婦から考えると、意見が一致しないときには夫の権威が発動するという妻の思いこそが、実際には結婚に大きな緊張をもたらしているのです。多くのキリスト者のカウンセラーは、対立の多いキリスト者の結婚における緊張に対処するのに最も役立つのは、夫という形で決定機関を導入することではなく、それを放棄することだと強調しています。むしろ夫婦は、互いに本当に耳を傾け、愛し合い、相手のために自分の計画を後回しにすることを学ばなければならないのです。私は、夫の最終的な決定権に必死に従おうとしながらも、それによって苦しんでいる女性たちの話を十分すぎるほど聞いてきました。役割が入れ替わったところを想像し、ある事柄について情熱的に一つの意見を持っている妻の立場に自分を置いてみると――夫も同じく情熱的に別の意見を持っていて、最終的には夫が決定を下すのです――、最終的な決定権という考え方は、夫にイエスのことばを無視させることになりかねない、ということがわかります。「ですから、人からしてもらいたく［ない］ことは何でも、あなたがたも同じように人にし［てはなりません］。」

27. マタイ24:10、ルカ12:1、コリント第一7:5、11:33
28. 補完主義者たちのもう一つの議論は次のようなものです。もし互いに従い合うこと（エペソ5:21）が三つの関係の組（夫と妻、親と子、主人と奴隷）すべてに当てはまるのだとすれば、二番目と三番目の関係の組は本質的に階層的なのだから、パウロが結婚における指導と服従という概念を掘り崩しているはずはない、というのです。しかし私はエペソ人への手紙5章21節を別様に理解しています。それは三つの組すべてを枠づける節ではなく、パウロの手紙の新しい部分への単なる移行の節であり、パウロはそれを特に夫婦関係に当てはめているのです。これは、シュライナーやナイトのような補完主義者のアプローチよりもはるかに優れたアプローチです。彼らは、夫と妻の両方に対して互いに従い合うという考えを受け入れてはいますが、それを奇妙な仕方で言い換えて、「妻は従順な妻としての自分の役割に服し、夫は自己犠牲的な指導者としての自分の役割に服する」としています。しかしパウロは明らかに、彼らに自分の役割に従うようにではなく、互いに従い合うようにと求めているのです。
29. ローマ13:1
30. 「hypotassō は、他の人よりも低い立場にあるという考えを含んでいるので、この語は権威への服従にも、対等な者同士の人格的な関係における服従にも適しています。前者の場合には、階層の中に客観的な序列があります。たとえばキリスト者は国家の権威の下にあり、したがってその権威に従わなければなりません。後者の場合には、序列は主観的なものです。信者は、あたかも階層の中にいるかのように、自分自身を他の人の下に置くべきなのです。つまり、他の人を自分よりも重要な者であるかのように扱うべきなのです。これがキリスト者の謙遜の本質です（ローマ12:10、ピリピ2:3）。」（アンドリュー・バートレット〔Andrew Bartlett〕、Men and Women in Christ、36頁）
31. シンシア・ウェストフォール（Cynthia Westfall）は Paul and Gender（第1章）でこう書いています。「エペソ人への手紙5章18-23節はギリシア語では一つの文を成しており、22節の妻たちへの指示は――22節で『従う』という動詞が省略されていることによって――文法的に21節の互いに従い合うことに依存している。」
32. パウロは手紙の中で、「従う」のこの意味を守ろうとしているように見えます。続く節で、親と子の関係、主人と奴隷の関係については、別の語――「聞き従う」――を選んでいるからです。
33. テトス2:4
34. 夫が妻よりも自己中心的になりがちな理由については、神経学的な説明さえあります――www.on.today.com/3CKRlsD を参照。
35. Men and Women in Christ、64頁。
36. Duvall と Hays、Grasping God’s Word、第13章。
37. アリストテレス、Politik（『政治学』）、1255b。
38. 私はまた、「ギリシアの環境でもローマの環境でも、奴隷は法的に結婚することが許されていなかった。したがって、エペソ人への手紙5章における妻と夫のふるまいについてのパウロの言葉は、第一に自由人、とりわけ奴隷のいる家庭を治めていた社会階層に向けられている」と考えています。（アンドリュー・バートレット、Men and Women in Christ、66頁）
39. デイヴィッド・ショーラー（David Scholer）、Journal of the Evangelical Theological Society 第30巻、1987年12月、416頁。www.bit.ly/3bDKpl9
40. アリストテレス、Politik（『政治学』）、1259a。
41. ケルソスは二世紀に生きた異教の批判者でした。この引用は、ロス・シェパード・クレーマー（Ross Shepherd Kraemer）の Her Share of the Blessings（128頁）によるものです。
42. ジョン・パイパー（John Piper）、This Momentary Marriage、第6–8章を参照。

43. グルーデムが「paterfamilias」という語を用いているのは一度だけで、それも第7章の脚注102においてです。そこでは別の著者が、家庭の最年長の成員の重要性を強調しています。
44. ヨハネ・パウロ2世（Johannes Paul II.）、Mulieris Dignitatem、88頁。
45. 創世記21:12
46. 士師記13:10-11
47. ルカ1:26-38
48. マタイ1:18-21
49. 列王記第二4:8-10
50. サムエル記第一25:3
51. サムエル記第一25:25
52. 原文の引用はNRSV［New Revised Standard Version］による。
53. リチャード・ヘイズ（Richard Hays）、First Corinthians、116頁。
54. たとえば、グルーデム（Grudem）の代表作 Evangelical Feminism and Biblical Truth［福音派フェミニズムと聖書の真理］は、平等主義の議論、なかでもコリント人への手紙第一7章が対等な結婚を教えているという議論に反論するために書かれました。ところがグルーデムは、800頁のうちわずか1頁を占めるにすぎない非常に短い節（6.7）の中で、コリント人への手紙第一7章は夫の権威あるリーダーシップを規定しているにすぎない、と主張しているだけです。しかも彼は、この箇所がエペソ人への手紙5章の階層的な解釈の適用を規定するだけでなく、エペソ人への手紙5章の解釈そのものを方向づけるべきだ、という見方に対しては何の反論も示していません。夫と妻の両方が互いに対して同じ権限を持っていると誤解の余地なく述べているコリント人への手紙第一7章のような箇所は――これはすべての解釈者が一致して認めている事実です――、一部の解釈者だけが夫に一方的な権威を与えていると主張している箇所（エペソ人への手紙5章）を解釈するうえで、重みを持つべきです。
55. たとえば、アンドリュー・バートレット（Andrew Bartlett）が Men and Women in Christ（18–19頁）で指摘しているように、トム・シュライナー（Tom Schreiner）は、フィリップ・ペイン（Philip Payne）の2009年の著書 Man and Woman: One in Christ への応答として詳細な要約を書き、反論を試みています。ペインはコリント人への手紙第一7章に丸々1章を割いているにもかかわらず、シュライナーは奇妙なことにこの章にまったく触れていません。クレア・スミス（Claire Smith）の場合も同様です。彼女は2012年に God's Good Design: What the Bible Really Says about Men and Women［神の良いご計画：聖書は男性と女性について本当は何を語っているか］という本を出版しました。彼女が掲げる目的は、結婚の最善のモデルを「決定すべき」「最も重要な聖書テキスト」を取り扱うことです。この本はドン・カーソン（Don Carson）らによって熱心に推薦され、多くの人がその網羅性を称賛しています。ところが奇妙なことに、結婚についての彼女の五つの章のどれ一つとして、コリント人への手紙第一7章を扱っていないのです。私はこれらの著者たちが不誠実だと言っているのではありません。ただ、かなり大きな盲点があること、そして「確証バイアス」の兆候があることを指摘しているだけです。確証バイアスとは、人が無意識のうちに、ある主題について聖書が語っていることのすべてを知るためではなく、自分の先入観を裏づけるためだけに聖書を用いてしまうことです。
56. Discovering Biblical Equality、238頁からの引用。
57. 出典：www.gates.ly/3bMqqQZ
58. 出典：サンドラ・ジョシェル（Sandra Joshel）とシーラ・マーナハン（Sheila Murnaghan）、Women and Slaves in Greco-Roman Culture、217–20頁。バー（Barr）、The Making of Biblical Womanhood（226頁）に引用。
59. スーザン・ハイレン（Susan Hylen）、Women in the World of the New Testament を参照。
60. 社会的な条件が、指導的な役割を担うことのできる人の選択をどれほど狭めるかをよりよく理解するために、裕福な地域にあって、主に大学教育を受けた人々から成る現代の教会を思い浮かべてみてください。そして、その教会で教育を受けていない労働者が指導的な役割を担うことが、どれほどありそうにないかを考えてみてください。その単純な理由は、その人々が彼について行くかどうか（したがって、彼がそもそも彼らを導くことができるかどうか）が疑わしいからです。こうした理由から、聖書にも奴隷が長老であった例は見当たらないのです。
61. ジョン・スタックハウス（John Stackhouse）、Finally Feminist、39頁。
62. コロサイ3:18
63. テトス2:5
64. ペテロ第一3:1

65. 本が長くなりすぎないように、ペテロの手紙第一3章1-7節については詳しく説明しないことにしました。しかし、アンドリュー・バートレット（Andrew Bartlett）の著書 Men and Women in Christ［キリストにある男性と女性］の第6章をお勧めします。この章は「Submission and Honour: 1 Peter」（服従と尊敬――ペテロ第一）と題されています。私の考えでは、バートレットは、ペテロが本質的に、エペソ人への手紙5章のパウロと同じ道をたどり、互いに従うことについての教えによって、文化の階層的な秩序を内側から崩していることを説得力をもって示しています。パウロと同様にペテロも、3章1-6節で、文化的に期待されていた女性の従属的な役割を覆しもしなければ、無条件に支持もしていません。むしろ、福音から生まれた新しい動機によってそれを修正しています。すなわち、キリスト者でない夫への恐れからではなく、神への希望と、夫をキリストのために勝ち取ろうとする努力からです。そしてパウロと同様にペテロも、文化的に期待されていたキリスト者の夫の権威的な役割を理想化することも非難することもせず、3章7節で三つの点においてそれを修正しています。1）夫は、妻に対して「同じように」ふるまうべきです（これは、補完主義の神学者の多くが見落としているように思われる決定的な表現です）。それは、それまでに次の関係について述べられていたのと同じようにです。すなわち、信者がその神と王に対して（2:13）、奴隷がその主人に対して（2:18-25）、キリストがご自分を処刑する者たちに対して（2:21）、そして妻がその夫に対して――創世記18章でのアブラハムに対するサラも含めて――（3:1-6）とったのと同じ、へりくだった服従の態度です。2）夫は、妻の力がより弱いことに配慮して、妻とともに暮らすべきです。3）夫は妻を尊敬すべきです。妻は（ギリシア・ローマ文化とは違って）従属的な立場にあるのではありません。救いを等しく受け継ぐ共同相続人だからです。ここでの「尊敬する」は、この手紙の中で先に、すべての信者が皇帝に対して示すべき服従を表すのに使われたのと同じ言葉です。2章13節（「［権威に］従いなさい」）と2章17節（「王を敬いなさい」）を比べてください。言い換えればペテロは、まったく同じ言葉は使っていないものの、夫たちに、妻に対しても服従（へりくだった、敬意に満ちた奉仕という意味での服従）を示すべきだと言っているのです。このように理解すると、ペテロはエペソ人への手紙5章のパウロと同じように、結婚における服従の意味を、単に他者の権威に従うことから、へりくだった奉仕と善意への献身へと修正しているように思われます。権威への服従は一方向にしか流れません。しかし、エペソ人への手紙5章とペテロの手紙第一3章が示しているように、キリスト者の結婚は、それが置かれている社会構造にかかわりなく、双方向に流れるへりくだった奉仕を証しするべきなのです。さらに、ペテロが妻の服従の理由として、神のご計画によって夫が妻に対して一方的な権威を持っているという事実を挙げていないことにも注意してください。もしペテロがそう信じていたなら、ここはそれに言及するのにうってつけの文脈だったはずです。しかし彼はそうしていません。実際、聖書のどこにも、夫が妻に対して一方的に権威を行使するよう指示されている箇所はないのです。
66. 創世記16:9
67. ついでに言えば、当時のアリストテレスの家庭規範と君主制の統治形態と同じように、今日では民主主義が、社会がこれまでに見いだした最善の統治制度なのかもしれません。
68. ペテロ第一2:15
69. ペテロ第一3:1-2
70. テトス2:5
71. テトス2:10
72. テモテ第一6:1
73. テモテ第一5:7, 14
74. 出典：www.bit.ly/3EL7OgM
75. この節については、ケヴィン・ジャイルズ（Kevin Giles）の What the Bible Actually Teaches on Women 第8章に負っています。
76. 創世記9:20-27
77. レビ記25:39-41; 25:44-46
78. この節については、ケヴィン・ジャイルズ（Kevin Giles）の What the Bible Actually Teaches on Women 第8章に負っています。
79. 教皇ヨハネ・パウロ2世、Mulieris Dignitatem、24頁。バー（Barr）、110頁に引用。
80. 出典：www.bit.ly/2ZXK1LY
81. 「子どもと親の関係は、本質的な点で私たちの今日の文化とは異なっていた。現代の世界では、子どもは成人したのちのある時点で親から独立し、もはや親の権威のもとにはいないことが前提とされている。古代世界ではそうではなかった。そこでは、成人した子どもは成人してからもずっと親の権威のもとにとどまることが期待されていた。」（ハワード・マーシャル（Howard Marshall）、Discovering Biblical Equality、188頁）
82. ジェーン・フッカー（Jane Hooker）は、もう一つの議論を持ち出しています。それをストームズのリストに加えておきます。「聖書における奴隷制の慣行と、より最近のアメリカの奴隷制の慣行との間には、かなりの

違いがある。」（出典：www.bit.ly/3GNFnk9）これによって彼女は、ここ数世紀の奴隷制を終わらせるための社会運動は理解できるが、1世紀の奴隷制はそれほどひどいものではなかった、と言おうとしているようです。しかし、1世紀にも奴隷は残酷に扱われていました。さらに、彼女は問題の核心を外しています。どちらの場合も、奴隷制とは経済的な目的のために人間を所有することだったのです。奴隷制の廃止は、奴隷に対するひどい扱いだけでなく、そのより穏やかな形にも向けられたものでした。

83. ケイン・フェルダー（Cain Felder）編、Stony the Road we Trod、226頁。バー（Barr）、第6章に引用。
84. ジャン＝ジャック・ルソー（Jean-Jacques Rousseau）、Emil oder Über die Erziehung［『エミール』］（1762年）。バー（Barr）、第6章に引用。
85. ジョン・スタックハウス（John Stackhouse）は Finally Feminist（56頁）の中で、これをもっと鋭く表現しています。「社会が家父長制的であったとき――新約聖書の文脈がそうであったように、また私たちの時代の現代社会を除く世界中のどこでもそうであるように――、教会はそれに合わせることによってつまずきを避けた。しかし今、現代社会が少なくとも公式には平等主義的になった以上、つまずきとなっているのは、教会が社会とともに歩まず、恣意的な性別の境界なしに、女性と男性がその賜物と召しに応じて仕えることのできる前例のない自由を喜ばないことなのである。このつまずきは、ほかの人々への伝道と、すでに回心した人々の……定着と成長の両方を妨げている。……この社会において教会が家父長制を続けていることは、［多くの人々］にとって宗教的な障害となっている。」